

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第96号

平成16年度京都府埋蔵文化財の調査	小池 寛	1
池尻遺跡第7次(D地区)の発掘調査—奈良時代の遺構を中心に—	石崎 善久	9
奈良岡遺跡再整理報告(2)—擦切施溝分割痕跡の残る石器について—	石井 智大	15
平成16年度発掘調査略報		21
18. 上安久城跡		
19. 馬路遺跡第4次		
20. 時塚遺跡第10次(G～J地区)		
21. 長岡京跡右京第825・840～842次、友岡・伊賀寺・下海印寺遺跡		
22. 内田山B1号墳・内田山遺跡		
府内遺跡紹介 102. 長岡宮宝幢跡		30
長岡京跡調査だより・93		32
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧		34
センターの動向		35

2005年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)内田山B1号墳出土六獣形鏡(S=3/4)



(2)内田山B1号墳出土六獣形鏡(部分拡大、S=3/2)

# 平成16年度京都府埋蔵文化財の調査

小池 寛

## 1. はじめに

平成16年度における京都府内の発掘調査の件数自体は、基本的には減少傾向にある。しかし、各遺跡で実施された調査は、各地域において非常に重要な歴史的な意味をもっていることはいうまでもない。本稿では、主要な発掘調査の成果について時代別に概観することを目的としている。なお、当調査研究センターの調査成果については、当該誌各号に掲載されている各遺跡の略報を参照願いたい。また、京都府教育委員会刊行の『埋蔵文化財発掘調査概報2005』にも、府内における発掘調査成果が集約されており、あわせて参照して頂きたい。

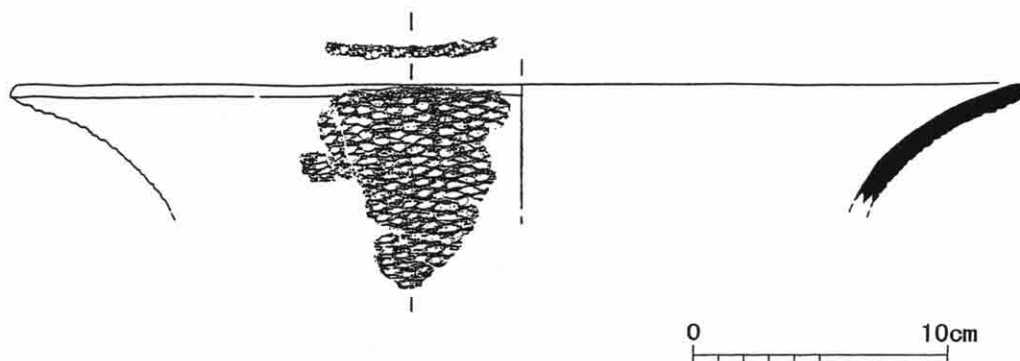
## 2. 主要な発掘調査成果について

### 縄文時代

(1)長岡京市上里遺跡では、**縄文時代中期の深鉢**が確認された。同遺跡が中期まで遡ることが判明した。なお、古墳時代後期の竪穴式住居跡や平安時代の前期の井戸跡なども確認された。(当センター：2004年11月)

(2)亀岡市案察使遺跡第6次調査では、鹿児島県佐多岬の南西約40kmにある10,600年前に噴出した**隠岐鬱陵火山灰層**を検出するとともに、**ネガティブタイプの押型文土器**が出土した。**押型文土器**は、神宮寺式土器に比定できる縄文時代早期の土器であり、亀岡盆地では、最古の土器である(第1図)。(当センター：2004年11月)

(3)京田辺市薪遺跡第6次調査では、**縄文時代中期末～後期初頭の直径10mの円形竪穴式住居跡**や一辺5mを測る**方形竪穴式住居跡**を確認した。南山城地域において中期末に比定できる集落



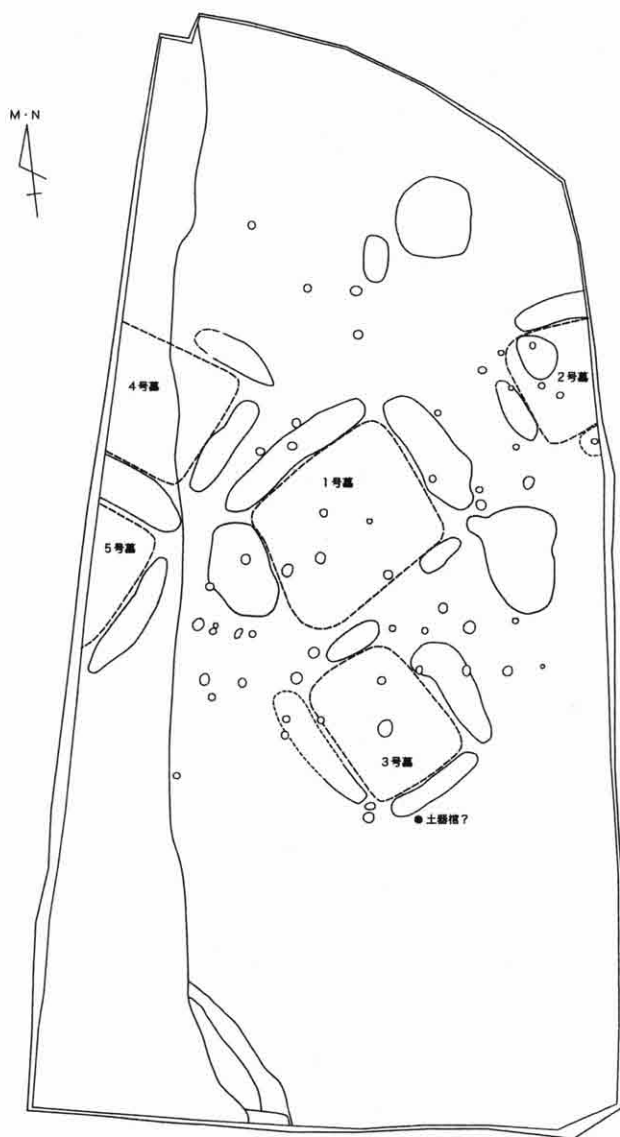
第1図 亀岡市案察使遺跡出土押型文土器  
(『京都府遺跡調査概報』第116冊より転載)

跡の検出は希少な事例である。(当センター：2004年12月)

### 弥生時代

(1)長岡京市神足遺跡では、弥生時代中期に製作された中細型銅剣の先端部が、弥生時代末期から古墳時代初期の溝から出土した。古墳時代の造成により溝に混入した可能性が指摘されている。銅鐸鑄型が出土した向日市鶏冠井遺跡とともに弥生時代中期を代表する拠点集落からの出土であり、その搬入経路など地域間交流を考えるうえで重要である。(長岡京市埋文センター：2004年4月)

(2)亀岡市時塚遺跡第6次調査では、弥生時代中期に比定できる直径6mの円形竪穴式住居跡を検出するとともに、直径0.2m前後を測るピットを多数検出した。また、調査地南端では、溝を共有する状態で複数の方形周溝墓を検出しており、居住域と墓域を区画して集落を営んだことが確認できた。(当センター：2005年8月)



第2図 亀岡市池尻遺跡第7次E地区方形周溝墓実測図  
(当センター、平成17年2月24日現地説明会資料より転載)

(3)亀岡市時塚遺跡第8次調査では、弥生時代中期のピットを多数検出するとともに、後述する時塚古墳と同一の主軸を有する一辺12mの方墳である時塚2号墳を検出した。(当センター：2005年11月)

(4)八木町諸畑遺跡第3次調査では、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡群を検出した。また、集落生成以前や以後における土石流を示す堆積土も検出された。八木町諸畑一帯での初めての面的調査でもあり、今後の周辺域における遺構の拡がりには注意を払う必要がある。(当センター：2004年11月)

(5)宮津市難波野条里制遺跡では、平安時代から中世に到る遺構、遺物が検出された。(当センター：2004年12月)

(6)山城町椿井遺跡では、弥生時代後期の直径9.2mを測る竪穴式住居跡が確認された。軍事ネットワークとしての高地性集落である可能性

が指摘されている。(当センター：2005年2月)

(7) 亀岡市時塚遺跡第10次調査では、弥生時代中期のピットを多数検出するとともに、**方形周溝墓**などを検出した。時塚遺跡第6・8次調査で確認した弥生集落の一連の遺構群である。なお、平安時代後期の井戸2基も確認された。(当センター：2005年2月)

(8) 亀岡市馬路遺跡第4次調査では、弥生時代中期の**方形周溝墓群**を確認した。また、飛鳥時代の竪穴式住居跡や平安時代の掘立柱建物跡も確認されている。(当センター：2005年2月)

(9) 亀岡市池尻遺跡第7次調査では、直線的に掘られた溝を共有しない**方形周溝墓群**を検出した。近接する時塚遺跡、馬路遺跡、車塚遺跡で確認された方形周溝墓の中では最も古く、また、周溝の共有の方法が異なることから、当該地に方形周溝墓が導入される状況を把握するうえで重要な検出例となった(第2図)。(当センター：2005年2月)

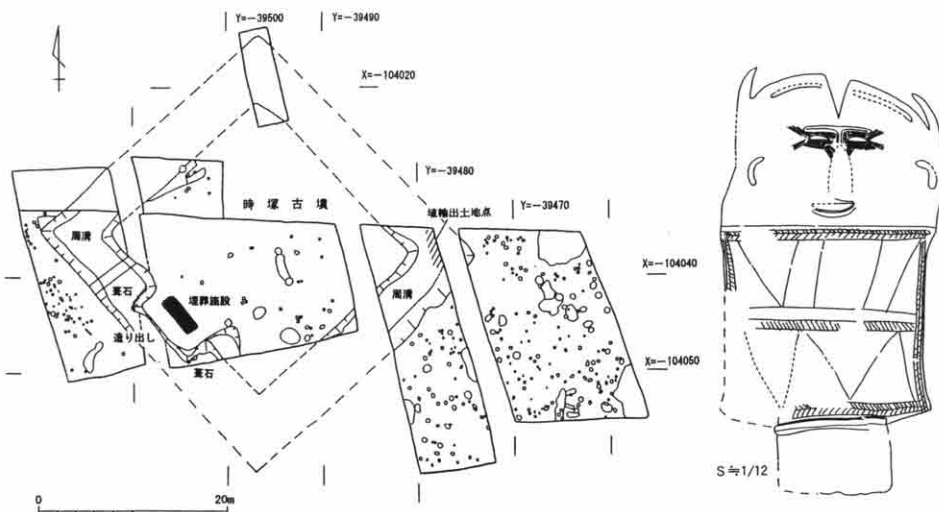
(10) 亀岡市車塚遺跡では、弥生時代中期の**方形周溝墓**や一辺11mの方墳、奈良時代の掘立柱建物跡などを検出した。(当センター：2005年2月)

### 古墳時代

(1) 亀岡市石堂古墳は、亀岡市保津町の標高330mの山林で発見された全長35mを測る**前方後円墳**であり、墳丘測量などの基礎的調査が亀岡市教育委員会によって実施された。墳形から古墳時代後半期に築造された可能性が高く、保津車塚古墳や千歳車塚古墳との比較研究が待たれる。(亀岡市教委：2004年4月)

(2) 長岡京市伊賀寺遺跡では、6世紀末～7世紀初頭の溝状遺構から土師器とともに残存状況の良好な銅芯金貼の**耳飾り**が1点出土した。周辺に古墳の存在を想起させる。(長岡京市埋文センター：2004年6月)

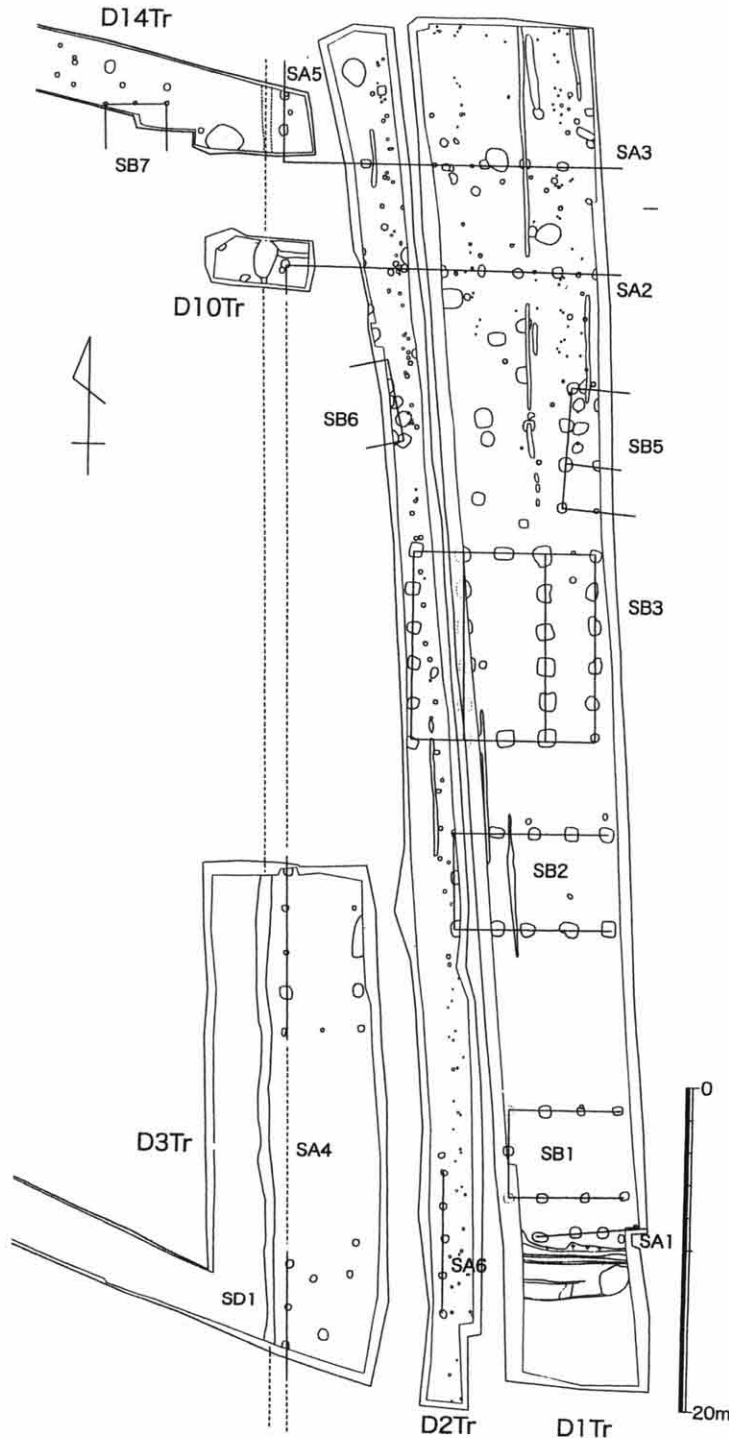
(3) 舞鶴市三角古墳では、古墳時代中期の**木棺直葬墳**2基と古墳時代後期の**横穴式石室墳**1基が確認された。特に、横穴式石室墳である三角4号墳からは、須恵器とともに水晶製切子玉が出土している。臨海部を広く眺望できる立地条件下にある。なお、2・3号墳では経塚を検出して



第3図 亀岡市時塚古墳および出土盾持ち人形埴輪略側図  
(当センター、平成16年8月21日現地説明会資料より転載)

いる。(当センター：2004年8月)

(4) 亀岡市時塚古墳は、造り出しを含む一辺が27mの新発見の方墳である。周溝の東隅部から盾持ち人形埴輪、人物形埴輪、盾形埴輪などの埴輪が出土し、また、南西辺中央の造り出しで確認された埋葬施設からはf字形鏡板や鉄剣・鉄矛・ミニチュア農工具などが出土した。5世紀後半に築造された古墳であり、地名である「時塚」との関係も想起される。なお、南東方500mに



第4図 亀岡市池尻遺跡第7次D地区実測図  
(当センター、平成17年2月6日現地説明会資料より転載)

所在する千歳車塚古墳との関係についても今後、検討する必要がある。盾部上部に顔を線刻する盾持ち人形埴輪の出土は、国内初出である(第3図)。(当センター：2004年8月)

(5) 精華町鞍岡山3号墳は、直径40m、墳丘高5.6mの円墳であることが判明し、埋葬施設中央で確認された盗掘坑の精査により銅鏡の破片や滑石製品約300点が出土し、墳頂部には埴輪が樹立されていたことが判明した。出土遺物から古墳時代前期末～中期初頭に築造されたと考えられる。また、墳丘の北側隣接地には、粘土を貼り付けた6×9mの瓢箪型の鳥状遺構が検出され、葬送に関する空間である可能性がある。南山城南西部での古墳時代の様相を考えるうえで基礎的資料となる。(精華町教委：2004年9月)

(6) 長岡京市恵解山古墳では、2段目の段築平坦面から埴輪列を検出するとともに、造り出しおよび前方部南西隅部を確認し、前方部が従来想定されてきた55m規模よりも大きく、76mである可能性が指摘された。(長岡京市埋文センター：2004年9月)



(7)城陽市芭蕉塚古墳では、新たに埴輪列を確認するとともに造り出しを確認した。(城陽市教委：2004年11月)

(8)宇治市市街遺跡南ブロック下層遺跡では、5世紀始めの溝から約80点を超える韓式土器および初期須恵器が出土した。渡来人との関係で解釈する必要が指摘されている。(宇治市教委：2004年11月)

(9)京都市左京区岩倉では、古墳時代前期の竪穴式住居跡と土器製作に要した粘土塊が出土した。(同志社大：2005年2月)

(10)木津町内田山B1号墳は、一辺17.5mの方墳であるが、埋葬施設が4基存在し、六獣形鏡や蓋形埴輪などが出土した。小規模方墳からの六獣形鏡などの出土は希有な事例である。(当センター：2005年2月)

#### 飛鳥時代

(1)京都市相国寺境内では、飛鳥時代の掘立柱建物跡1棟と竪穴式住居跡20基を検出した。掘立柱建物跡の主軸が南北方向であることと柱穴の規模が一辺1mを測ることから、官衙的な性格を想定する見解が提示されている。(京都市埋文研：2004年11月)

(2)向日市長岡京跡左京第492次調査に伴う整理作業において飛鳥時代後期に比定できる土器に「長正□」の墨書が確認された。長岡の地名は『続日本紀』延暦三(784)年が初出と考えられてきたが、当該地名が飛鳥時代後期にまで遡ることが判明した。(向日市センター：2005年1月)

#### 奈良時代

(1)京都市大宅廃寺では、礎石の抜き取り坑を3か所で確認し、瓦積み基壇構築の際の版築も確認された。また、水煙らしき青銅製品も出土した。一方、出土した瓦には、飛鳥地方に所在した紀寺出土の瓦や藤原京出土瓦と同じ文様を有する瓦も出土している。(京都市埋文研：2004年6月)

(2)木津町片山遺跡では、奈良時代中期から後期にかけての掘立柱建物跡が確認された。建物跡は、東西約4.8m、南北10m以上を測り、柱自体の直径は0.3~0.4mである。片山遺跡の地理的条件から官衙の可能性も指摘される。(当センター：2004年11月)

(3)加茂町恭仁京跡では、昨年度に検出されていた回廊と考えられる柱穴をさらに確認した。(京都府教委：2004年11月)

(4)井出町井手寺跡では、8世紀中葉の石敷き遺構とともに三彩の垂木先瓦などが出土した。橘諸兄にふさわしい大寺院であったことが判明した。(井出町教委：2005年1月)

(5)亀岡市池尻遺跡第7次調査では、南北5間(11m)×東西2間(4.8m)の身舎とその東西両面に庇が敷設された掘立柱建物跡を中心に計画的に配置された掘立柱建物跡群や柵、溝などが確認された。飛鳥時代の池尻廃寺に隣接していることや規模や構造から丹波国府の可能性を指摘することができる。今後は、同市千代川遺跡などとの比較検討が必要である(第4図および本誌石崎論文参照)。(当センター：2005年2月)

(6)亀岡市丹波国分寺跡の調査では、正門の南門跡が確認された。しかし、伽藍の中軸線より

西方にずれていることと出土遺物が平安時代初期であることから、再建時の南門跡と推測されている。(亀岡市教委：2005年3月)

### 長岡京期

(1)平成14年度に調査された長岡京市長岡京跡右京第740次調査では、鑄で錢種を特定できない緡銭の状態が出土した。今年度、奈良文化財研究所で非破壊の方法で断層写真を撮影した結果、和銅開珎や神功開寶、萬年通寶などの錢貨であることが判明した。平安時代以前の緡銭としては希有な出土例である。(長岡京市センター：2004年5月)

(2)向日市長岡京跡左京第497次調査では、一辺1.35mを測る縦板横棧隅柱式の井戸が検出された。当該地は、一条条間南小路北側側溝の北側隣接地の宅地内にあたり、その構造と規模から貴族邸宅か役所に付随する施設である可能性が指摘された。(向日市埋文センター：2004年10月)

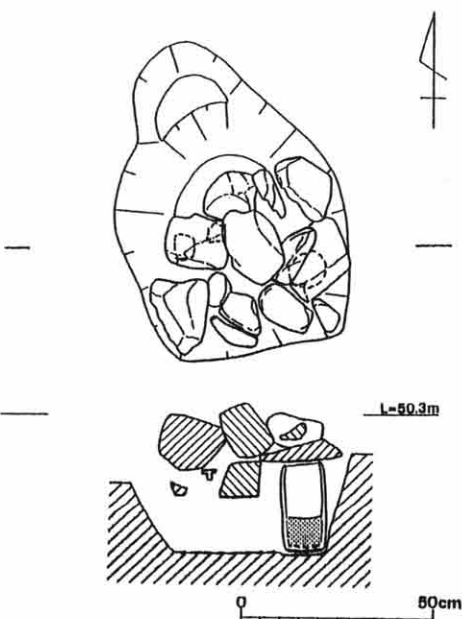
(3)向日市長岡宮跡第437次の調査では、朝堂院南面回廊が翼廊と呼ばれる構造であったことが判明した。(向日市埋文センター：2005年3月)

### 平安時代

(1)京都市平安京跡右京六条三坊六町で検出した平安時代前期の井戸から全長23cmの男性人形と全長16cmの女性人形が出土した。いずれも杉材により立体的につくられており、男性人形には「葛井福万呂」、女性人形には「檜□阿古□□」と判読できる人名が墨書されている。人形の同時代の用法を知るうえで貴重である。(京都市埋文研：2004年6月)

(2)宇治市宇治別業跡では、平安時代中期の池庭跡が確認され、平等院の前身である宇治別業の規模や構造を考えるうえでの定点となった。(宇治市教委：2004年7月)

(3)京都市平安京跡では、平安時代後期にあたる院政期の東新御所に関係する園池跡が確認された。東新御所は、鳥羽天皇の皇后である待賢門院が創建した法金剛院の付属施設である。(京都市埋文研：2004年7月)



第5図 舞鶴市三角2号経塚実測図  
(当センター、平成16年8月7日  
現地説明会資料より転載)

(4)亀岡市篠窯跡群大谷3号窯では、平安時代前期の緑釉陶器と窯道具である三叉トチンが出土した。今まで篠窯跡群で出土した緑釉陶器は、濃緑色であり、三角口ストル窯で焼成されたと考えられてきたが、今回出土した緑釉陶器は淡緑色で、登り窯で焼成されたことが判明した。篠窯跡群で焼成された緑釉陶器を見直す必要を提起した。(大阪大学：2004年9月)

(5)宇治市市街遺跡では、平安時代後半に比定できる幅4mの道路遺構を15mにわたって検出するとともに、同時期の邸宅内の庭園や建物跡が確認された。現在の碁盤目状の市街が平安時代後期にまで遡る可能性が高くなった。また、当該道路遺構は、平等院から西





されていることが確認された。当該地は、本能寺の寺域であったと推定されており、仮に法華宗に関する内容であるならば、同寺に関する初出の資料となる。(京都市埋文研：2004年10月)

(3)舞鶴市田辺城跡第25次調査では、東南隅の三ノ丸武家屋敷地に該当し、京極期の土塁跡や牧野期の道路跡、そして、幕末の武家屋敷跡などを確認した。(舞鶴市教委：2004年10月)

(4)京都市淀城跡では、16世紀末～17世紀初頭の整地層から掘立柱建物跡を検出するとともに、掘立柱建物跡の検出面下に0.7mの整地層を確認している。元和九(1623)年に徳川秀忠によって新しく築城される以前の町の一部である可能性が指摘された。(京都市埋文研：2005年3月)

### 江戸時代

(1)京都市東本願寺では、御影堂の北西約10mの地点から火災の痕跡が観察できる布積み方法で構築された石垣が発見された。御影堂が現在の状況になった17世紀中葉の築造である可能性が指摘された。(東本願寺：2004年6月)

(2)八幡市木津川河床遺跡第16次調査では、江戸時代後期の道路や橋脚の一部を検出した。当該時期の景観を復原するうえで重要な成果を得ることができた。(当センター：2004年6月)

(3)向日市長岡宮跡第433次調査では、江戸時代後期に比定できる瓦組みの排水溝や断面形状が「U」字形を呈する排水溝などが確認された。向日神社社領で元禄年間に西国街道の排水溝を改修したこととの関係が推定されている。(向日市埋文センター：2004年9月)

(4)園部町園部城跡第6次調査では、18世紀後半～19世紀にかけての土坑から伊万里、唐津、丹波、清水などの陶磁器類が多数出土した。当該地は、安政年間の絵図によると土屋敷が所在したことがわかっており、当時の生活の一端を把握することができた。(当センター：2005年11月)

(5)福知山市岡ノ遺跡では、江戸時代初期に比定できる断面「V」字形を呈する堀を検出した。福知山城と同時期の土地利用の一端が確認できた。また、同遺跡では、奈良時代の掘立柱建物跡や弥生時代後期の方形周溝墓なども確認されており、大規模な複合遺跡であることが判明した。(当センター：2004年12月)

### 3. まとめ

以上が、平成16年度に京都府内において実施された主要な発掘調査成果の概要である。発掘調査の件数が減少傾向にはあるが、大山崎瓦窯や池尻遺跡の丹波国府に関する遺構の検出など、極めて重要な成果が多く見られた年度であるといえる。今後は、こられる調査成果を各遺跡が所在する地域の歴史にいかにかに反映させて行けるかが、重要な作業となる。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第1係長)

# いけじり 池尻遺跡第7次(D地区)の発掘調査

## —奈良時代の遺構を中心に—

石崎 善久

### 1. はじめに

この調査は国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

池尻遺跡は、呉弥山南麓に広がる低位段丘上に位置しており、これまでに実施された第1～9次調査により、弥生時代前期を中心とする遺構群、白鳳寺院とされる池尻廃寺や、奈良時代前半の漆工房関連遺物などが確認されている。また、当遺跡を含む、桂川東岸地域では、丹波国分寺・国分尼寺が造営されるとともに、国分寺創建瓦を生産した三日市遺跡、奈良時代の官衙的建物群の確認された車塚遺跡、国分尼寺前面に広がる集落である河原尻遺跡、平安時代を中心とする掘立柱建物跡群が確認された馬路遺跡や時塚遺跡など、近年の国営農地に伴う発掘調査で重要な成果があげられつつある地域である。また、足利健亮氏の想定する奈良時代山陰道はこの地域に推定されており、これら奈良時代の遺跡群は、山陰道を中心に展開しているものと考えることができる。

なお、池尻遺跡第7次調査はD・E地区の2か所で実施し、D地区では今回紹介する奈良時代の建物群を、E地区では弥生時代中期初頭を中心とする方形周溝墓群を検出したが、今回はD地区についてのみ概略を報告する。

また、D地区の遺構についてはその重要性から、関係諸機関と協議の上、現状での埋め戻し保存がなされることが決定された。そのため、遺構については完掘しておらず、また、精査も十分に実施していない部分があるため、未確認の柱穴などが存在する可能性が高い。遺物は包含層のものが主体であり、部分的に掘削を実施した柱痕や柱掘形の埋土内からは、極少量の遺物を検出したに過ぎない。

### 2. 調査概要

調査は、亀岡市教育委員会の試掘調査成果を受け、D1～7・10・14トレンチを設定して実施した。その結果、D1～3トレンチを中心に掘立柱建物跡群と建物関連遺構を検出した。以下、奈良時代中～後半に造営されたと考えられるほぼ真北に方位をとる各遺構について概観する。

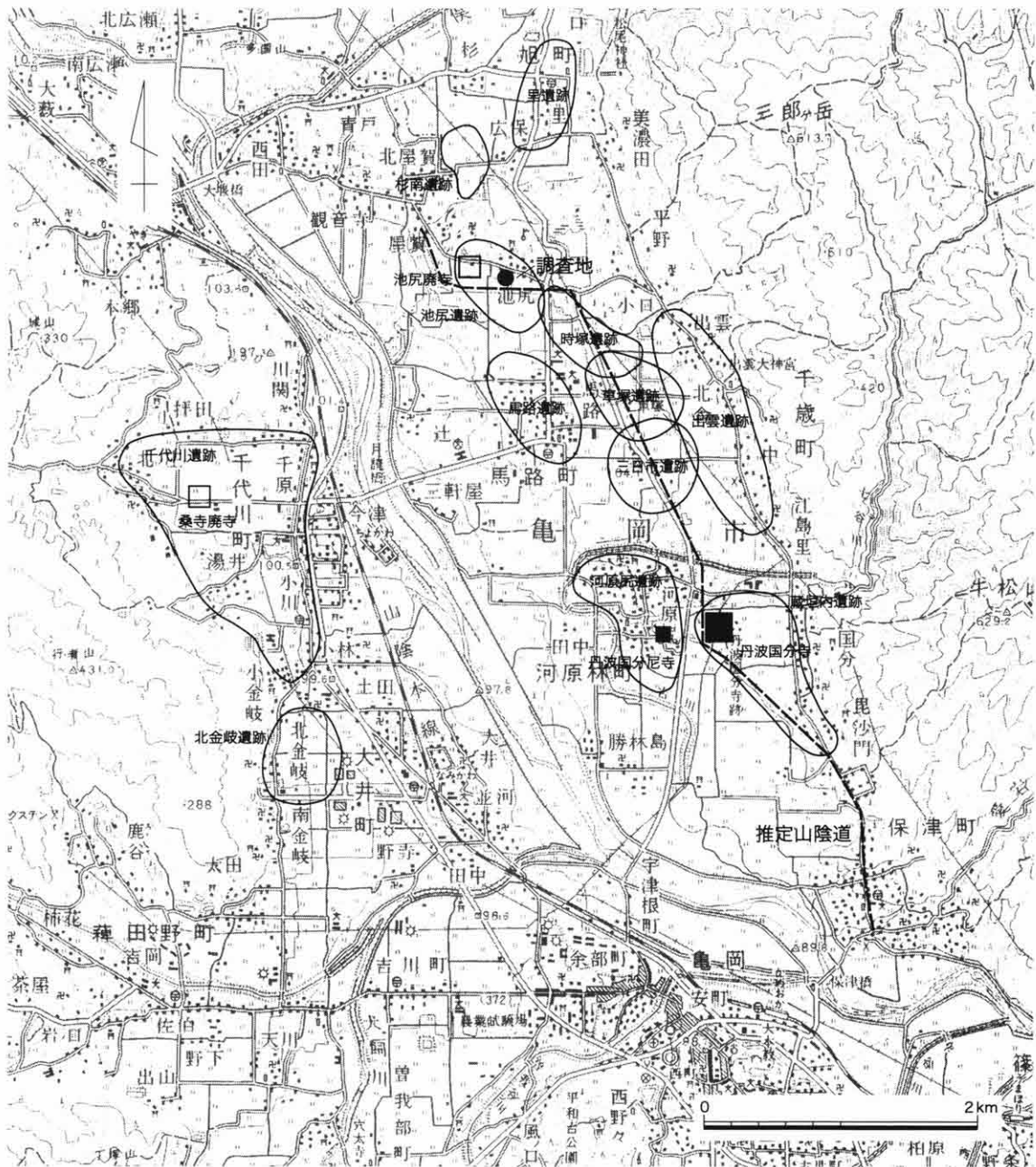
**掘立柱建物跡S B01** D1トレンチ南で確認した東西棟の建物である。規模は南北2間(6m)、東西3間(7.5m)以上を測る。柱穴は方形掘形であり、一辺50cm前後を測る。

**掘立柱建物跡S B02** S B01の北に位置する東西棟の建物である。規模は南北2間(6m)、東

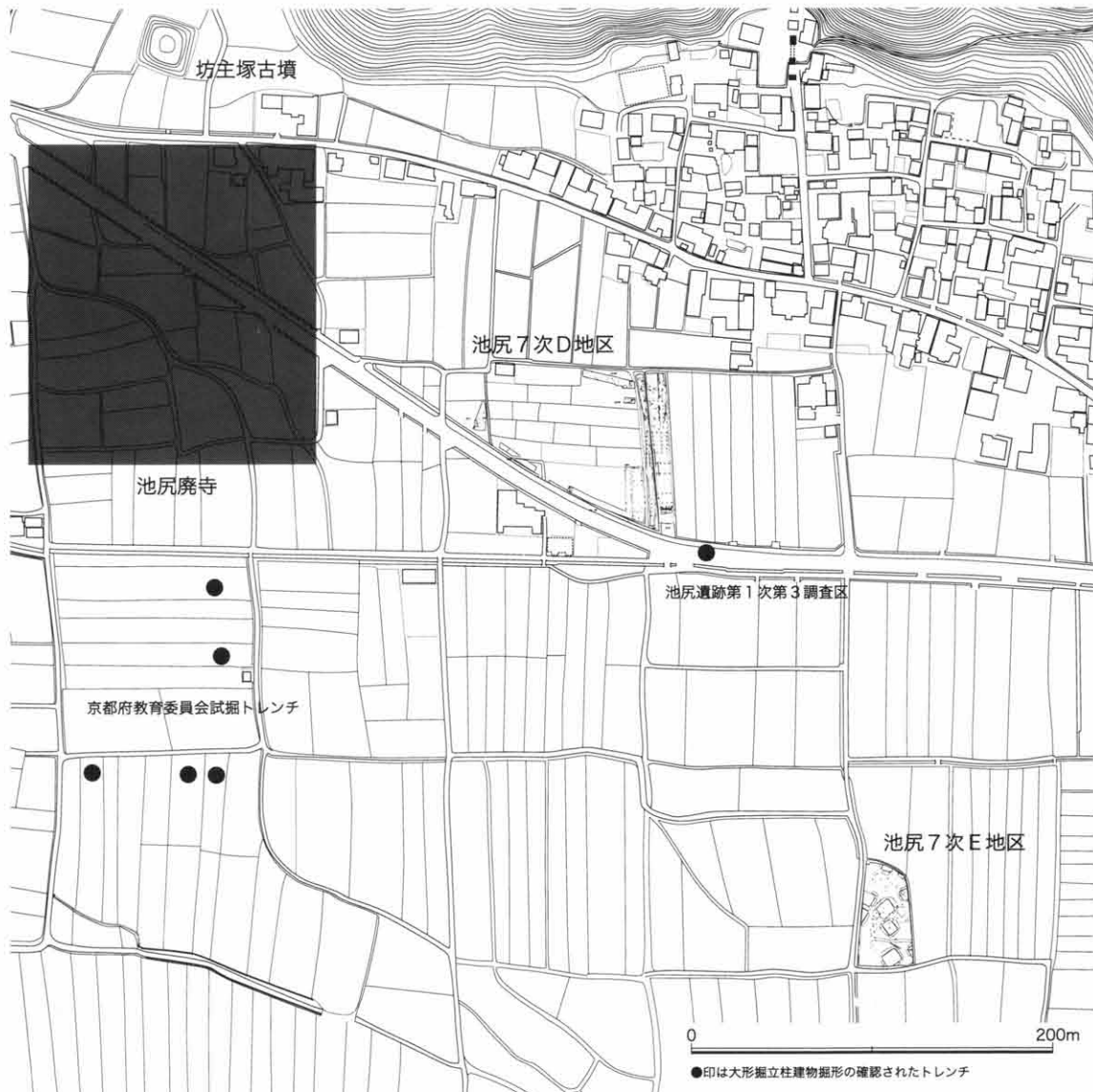
西4間(11m)以上を測る。柱穴掘形は1辺70cm前後の方形を呈する。また、大部分の柱穴から柱抜き取り痕が確認された。

掘立柱建物跡S B03 S B02の北に位置する南北棟の建物である。南北5間(11m)、東西2間(4.8m)の身舎の東西両面に庇がとりつく構造である。庇の柱穴は1辺70cm前後の方形、身舎の柱穴は1辺1m前後の方形を呈する。掘立柱建物跡S B02同様、大部分の柱穴から柱抜き取り痕が確認された。柱穴の1基から瓦(第4図8)が出土していることから瓦葺建物であった可能性がある。

柵S A02・04 上記の建物群を取り囲むように配置された柱穴群である。板塀であったものと



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡(奈良・平安時代)分布図  
(国土地理院1/50,000京都西北部をもとに作成)



第2図 調査区配置図(1/4,000)

考える。柱掘形は1辺30cm前後の方形を呈する。南北68m、東西25m分を確認している。また、掘立柱建物跡S B04は柱穴が小規模であるものの、柵S A04と一体になる掘立柱建物跡であると考えられる。

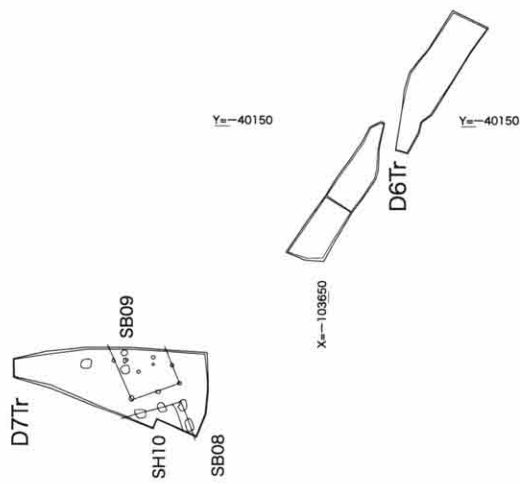
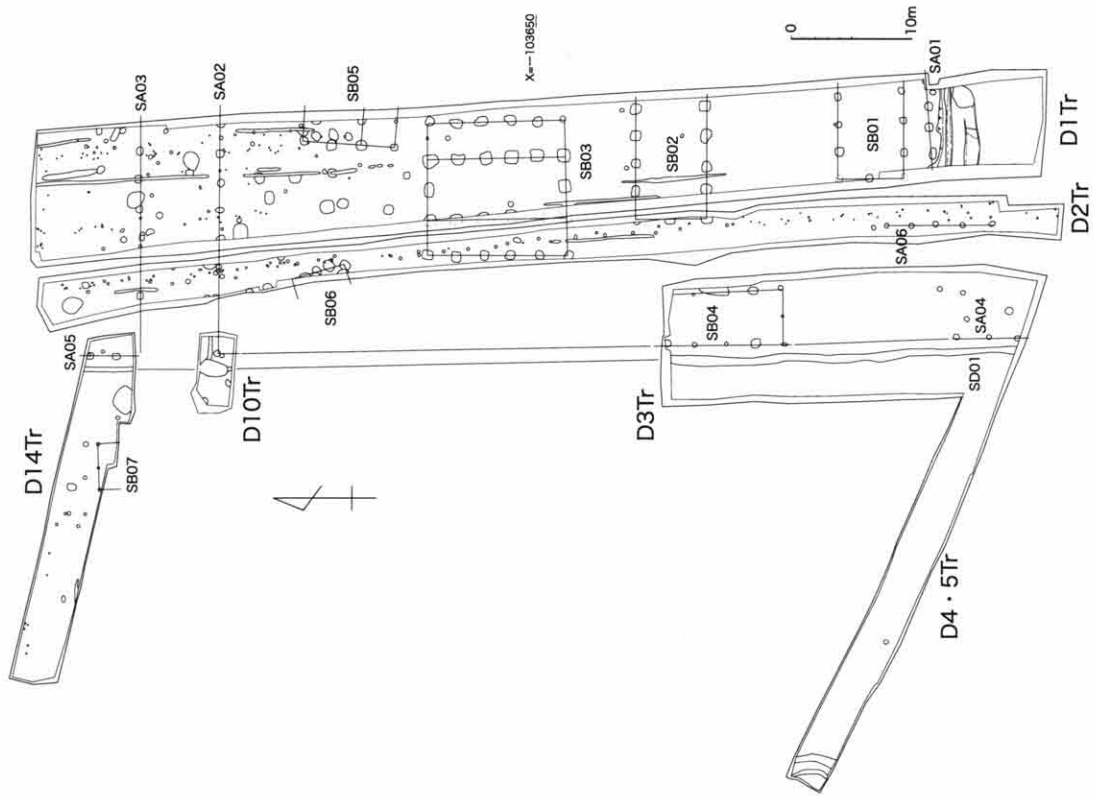
柵S A03・05 柵S A02の北で検出した。柵S A02・04と同様の区画が北に存在することを示している。柱掘形は一辺30cm前後の方形を呈する。

溝S D01 D3・10・14トレンチで確認した南北方向の素掘溝である。D10トレンチでは東へ分岐する溝を確認した。上記の板塀による区画の外周をめぐるものと考えられる。

柵S A06 D2トレンチで確認した南北方向の柱穴群である。各柱穴は直径30cm前後の円形を呈するため柵と判断した。

以上の遺構群は真北を強く指向し、また、計画的な配列がなされている。

このほかに、真北に主軸をとらない掘立柱建物跡群や、竪穴式住居跡、中世の土坑、中世以降の素掘り溝などを確認している。時期の判明する掘立柱建物跡S B08は奈良時代前半と考えられ、

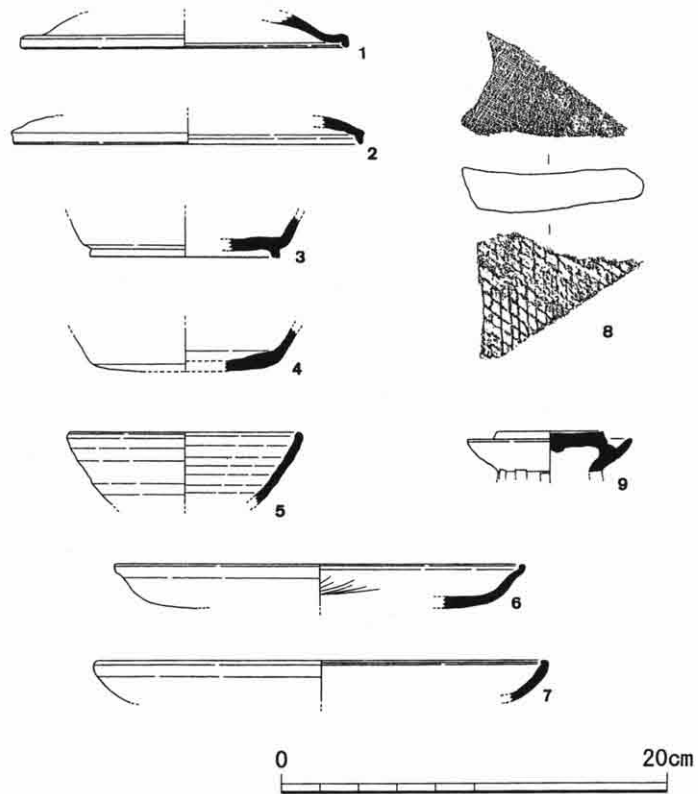


第3図 D地区検出遺構配置図



大形掘立柱建物群に先行する土地利用がなされていたものと考えられる。また、精査を十分に実施していないため詳細は不明であるが、D1・2トレンチ下層には弥生時代中期と思われる方形周溝墓群を確認した。

なお、出土遺物は遺構掘削をほとんど実施しておらず、包含層からの出土量自体も少量である。また現在のところ未整理のため詳細な検討はできていないものの、概ね、第4図に示す奈良時代中葉から後半のものが主体と考える。一部、平安時代から中世に属するものがあるが、これらは真北に主軸をとるもの以外の建物の時期を示しているものと考えたい。また、特殊な遺物として、D7トレンチで検出した竪穴式住居跡SH10から陶硯が出土している。



第4図 出土遺物実測図(S=1/2)

(1・2・4～7：D3トレンチ出土 3：D2トレンチ出土  
8：SB3出土 9：SH10出土)

### 3. まとめ

今回の調査により奈良時代中葉から後半にかけての大形掘立柱建物群が溝・板塀により区画された中に整然と配置されている状況が明らかとなった。池尻遺跡第1次第3調査区で検出された奈良時代初頭の土坑を切る大形掘立柱建物跡も位置関係から今回確認した区画内に存在した建物であると考えられる。区画の全体規模自体は不明であるが、こうした区画は今回の調査地の中で2か所が確認された。板塀との位置関係から今回検出した建物群は区画の中心ではなく、西寄りに位置するものと判断され、中心的な施設はさらに東側に存在するものとする。また、建物の存続時期は長期にわたるものではなく、柱の大部分が抜き取られていることから短期間のうちに廃絶、移築がなされているものと判断される。

周辺で京都府教育委員会が実施している試掘調査では、第2図に示す各地点からも一辺80cmから1mにおよぶ柱掘形をもつ掘立柱建物跡が検出されている。この調査成果からみて同様の区画と大形掘立柱建物群が更に広範に展開している可能性が高い。また、この地区の条里制地割は若干東に方位を振って施行されているが、池尻廃寺南東隅で条里が乱れており、池尻廃寺寺域には少なくとも、条里施行段階で何らかの区画施設が残り機能していたことが推測される。池尻廃寺出土瓦が白鳳期のものとされるのに対し、出土土器の主体的な時期は、奈良時代中葉から後半に

属することも興味深い点である。

このように、池尻遺跡では、大規模な区画内に配置された掘立柱建物群が複数存在しているものと判断することができる。また、第2図の地形図にみられるように、呉弥山南裾部分は直線的に整形されている部分があり、建物群造営に際し大規模な造成作業が実施された可能性が考えられる。

以上の点から、今回検出した大形掘立柱建物跡群は少なくとも何らかの官衙的施設の一角を形成するものであるとみて間違いないと考える。官衙の性格としては丹波国府もしくは桑田郡衙を想定することができる。

国府であるか郡衙であるかについては、今回出土した遺物から検証することは困難であるが、掘立柱建物跡S B03ですら中心的な建物ではないことや、池尻遺跡全体に展開する大形掘立柱建物群の存在を考えた場合、国府の一角である可能性が高いと考えたい。この段階で、丹波国分寺・国分尼寺が創建され、それに伴う瓦窯などが造営され、車塚遺跡第7次A地区においても官衙的建物群が検出されるなど桂川東岸地域には官衙的色彩の強い遺跡群が密集する。また、足利氏の想定された古山陰道がこの地域を通過する点なども、池尻遺跡が奈良時代国府の一角であることを傍証するものといえよう。近年の各地域における国府の調査成果から、国府は政庁を中心に配し、その周辺に機能分化した官衙群が配置されるものと考えられている。今回検出した建物群も政庁ではなく、国府の一角を形成する官衙であると考えたい。

これまで、有力な国府推定地として千代川遺跡があげられていたが、今回の調査成果は丹波国府所在地を検討する上で貴重な資料を提示することができたと考えられる。

以上、池尻遺跡では国府の一角の可能性のある建物群を確認することができた。近年の国営農地関係遺跡の発掘調査により、丹波地域の歴史は大きく書き換えられようとしている。今後、周辺地域の調査が実施されることにより、池尻遺跡を含め古代丹波におけるこの地域の位置付けがより明確になるものと期待される。

なお、本稿を執筆するにあたり、京都府教育委員会藤井整氏には試掘調査の成果についての資料提供をしていただいた。記して謝意を表する。

(いしざき・よしひさ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

#### 主要参考文献

- 田代弘「2. 池尻遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 柴暁彦「2. 池尻遺跡第2次」(『京都府遺跡調査概報』第58冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 『新修 亀岡市史』本文編 第1巻(亀岡市) 1995

# なぐおか 奈具岡遺跡再整理報告(2)

## —擦切施溝分割痕跡の残る石器について—

石井 智大

### はじめに

奈具岡遺跡<sup>(注1)</sup>ではそれほど量は多くないものの、弥生時代中期後半の石斧や石庖丁、石鏃などの石器が出土している。その中に、擦切施溝分割の痕跡が認められる磨製石器をごく少数のみであるが確認することができた。小稿ではこれらの石器について観察を行い、これまでの報告を補完するとともに、擦切施溝分割による石器製作や石器の改変・転用という視点から多少の考察を試みたい。

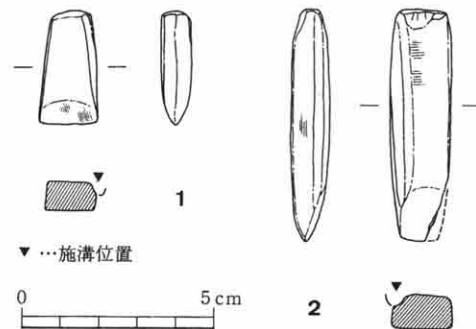
### 1. 擦切施溝分割を用いて製作された石器

奈具岡遺跡から出土した石器の中に、擦切施溝分割を用いて製作されたと考えられる石器は2点存在している。いずれも小型石斧である(第1図)。

1は第7・8次調査出土の小型石斧<sup>(注2)</sup>であり、緑色凝灰岩とみられる軟質石材によって製作されている。報告では鑿の模造品の可能性がある石器として報告されており、擦切施溝分割の痕跡の有無に関しては記載されていない。長さ3.0cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cmで、長方形の平面形をもち、両刃である。片側の側縁に擦切施溝分割の痕跡が残存している。擦切施溝は片面のみから行われており、板状の素材に対して片面から溝を入れて分割したと考えられる。

2は第7・8次調査出土の小型石斧<sup>(注3)</sup>であり、堆積岩とみられるやや軟質の石材によって製作されている。報告では曲面研磨用の工具とされた磨製石器である。刃部が一部欠損しているためにこうした認識がなされたものと思われる。報告においても擦切施溝分割の痕跡が注意されている。長さ6.2cm、最大幅1.6cm、最大厚1.0cmで、やや細長い長方形の平面形をもち、やや片刃に近い両刃である。刃部の半分程度を欠損している。片側の側縁に擦切施溝分割の痕跡が残存している。擦切施溝は片面のみから行われており、板状の素材に対して片面から溝を入れて分割したものと思われる。

以上の2点に共通しているのは小型石斧である点と、軟質の石材を用いて製作されている点、そして片側の側縁に擦切施溝分割の痕跡が残っている点である。1は平面形が長方形で刃部が形成さ



第1図 擦切施溝分割の痕跡が残る石器

れているなど斧形を呈するため小型石斧としたが、斧というより鑿や楔とする方が適当かもしれない。これが模造品として製作された可能性は否定できないが、刃がしっかりと作られている点などからは、工具として実際に使用される石器である可能性も全くは否定できないものと考えられる。

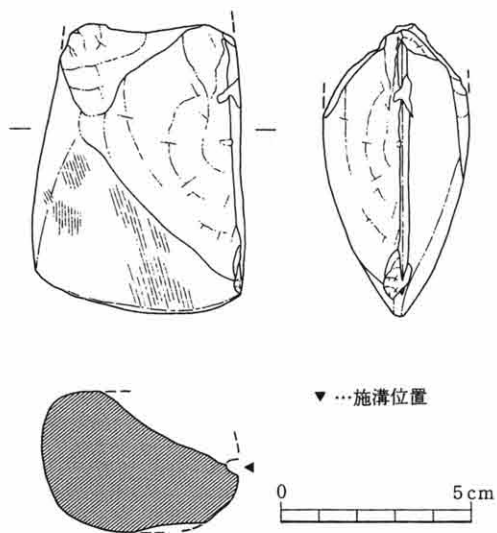
## 2. 擦切施溝の残る両刃石斧

擦切施溝分割によって製作された痕跡が残る石器について述べたが、ほかに両刃石斧に擦切施溝の痕跡が認められるものが存在している(第2図)。

この両刃石斧はほぼ半分に折損しており、使用中に破損した可能性が高い。第4次調査において出土したもので、凝灰岩とみられるやや軟質の石材が使用されている<sup>(注4)</sup>。報告においても擦切施溝の痕跡の存在が注意されている。片側の側面のほぼ中央に、長軸に平行して擦切施溝によるものと思われる幅2.5~3.0mm、深さ2.5mmほどの溝が認められる。この溝は側面に対して直交方向、刃部に対して平行方向に入れられている。こうした点から、この石斧の製作に伴う痕跡ではないことは明らかである。この溝は石斧が折損した後に何らかの目的のもとにつけられたものと考えられる。

反対側の側面には擦切施溝が認められない点からみて、この溝は擦切施溝分割によって両刃石斧をきれいに二枚の板状に分割しようとしたものではないと思われる。一方、溝を境に大きな剥離面が認められる(第3図)。この剥離面には、溝の中央付近を基点とするリングが明瞭に認められ、溝の中央付近が剥離時の打点となっていることがわかる。打点となったと考えられる箇所には、不明瞭ではあるが溝に直交する形で幅1.5mm程度の筋状の痕跡が認められ、この箇所が打点となっている可能性が高い。また、剥離面と残存している溝の関係をみると、打点と考えられる部分の周囲では溝が剥離によってほぼ半裁された状態で、剥離面側には溝の側壁の立ち上がりがほとんど認められないのに対し、溝の左右の端部付近では剥離面側に溝の側壁の立ち上がりが残

存し、溝の断面形が「J」字形になっている。これらの点からみて、擦切によって溝をつけた後にその溝の中央付近に何らかの



第2図 擦切施溝の痕跡が残る両刃石斧



第3図 両刃石斧にみられる剥離面

工具を用いて間接打撃を加え、剥片を剥離したものと考えられる(馬場2004)。両刃石斧のような丸みのある石器から厚みのある剥片を確実に取ろうとした場合、擦切施溝を用いて切り込みを入れた後に割り取るという手法は合理的であると考えられよう。

### 3. 奈良岡遺跡出土の擦切施溝痕跡の残る石器の評価

以上、擦切施溝分割の痕跡が残る小型石斧と、擦切施溝を利用して剥片を取ったと考えられる両刃石斧の破損品について述べてきた。

擦切施溝分割を用いた片刃石斧や石庖丁などの磨製石器の製作は、日本列島内の各地の弥生時代中期後半の遺跡において広く認められる。しかしながら、弥生時代の石器製作に伴う擦切施溝分割の手法の成立過程や空間的な広がり、技術的基盤などについてはまだ明らかになっていない部分が多い。特に技術的基盤に関しては、これまでに朝鮮半島との関連(下條1987)や玉作との関連などが想定されているが(土屋2004)、まだ個々の遺跡・地域における資料の分析・検討段階にあるものと思われる。

奈良岡遺跡の例は、擦切施溝分割による石器製作が近畿地方北部にも存在することを示している。近畿地方北部における擦切施溝分割による石器製作を評価する上では、奈良岡遺跡の例が他の遺跡・地域の例とどのような関係にあるのかという点を考えていく必要がある。特に、その技術的基盤に関する差異があるのかどうかという点を視野に入れておくべきであろう。

他の遺跡・地域の例との比較は小稿では行う余力がないが、それを考えていく上での基礎的な整理として、奈良岡遺跡でみられる擦切施溝分割の手法がどのような技術的基盤の上にあるのかという点に関して考えておきたい。

この問題を考える上で注目されるのは、両刃石斧の破損品に擦切施溝がなされている資料である。この資料に関しては、破損後に剥片を得るための原材とされたと推測された。この例では、両刃石斧のような厚みのある素材から擦切施溝を利用して素材となる剥片を剥離しており、他の遺跡で石器製作に伴って認められる平たい石材を平面的に分割していくような擦切施溝分割のあり方とはやや異なっているように思われる。

先に見たように、奈良岡遺跡の擦切施溝の残る両刃石斧の破損品は溝を施した後に何らかの工具を用いて間接打撃を行い、剥片を剥離していると推測される。こうした方法は、玉作において素材剥片を得るための型割を行う方法と類似している(田代・増田1993、馬場2004)。また、奈良岡遺跡においては擦切施溝分割を用いて碧玉・緑色凝灰岩製の管玉が活発に生産されている。これらの点からみれば、この例は玉作の技術との関連性で理解できる可能性があるのではなかろうか。管玉に用いられている緑色凝灰岩とは質が異なるとはいえ、この両刃石斧の破損品が緑色凝灰岩に似たやや軟質の石材を用いて製作されている点も、玉作との技術的な関連性を窺わせる点であろう。

一方、奈良岡遺跡において擦切施溝分割を用いて製作された石器はいずれも小型の石斧である。これらは、サイズから考えれば破損した他の石器を素材として十分に製作可能である。また、1

の小型石斧の石材は、質的には擦切施溝の残る両刃石斧破損品とも類似する軟質の石材である。製作過程を示す未成品などの資料が確認できないため確実なところは不明であるが、両刃石斧など大型石器の中で石材が軟質のものの破損品から素材剥片を得ていたとすれば、その剥片から小型石器が製作された場合も想定できよう。破損した大型石器を石器素材として利用する場合に玉作との関連で擦切施溝が用いられていたとすれば、そうして得られた剥片から小型石器を製作する際に用いられた擦切施溝分割も、玉作との関連で考えておくべきであろう。

#### 4. 石器の改変・転用に際しての擦切施溝分割

奈具岡遺跡で出土した擦切施溝分割の痕跡の残る小型石斧が大型石器の破損品を素材として製作された可能性について述べたが、これは破損した石器をそのまま廃棄せずに他の器種へ改変・転用していたということである。

旧石器時代や縄文時代の石器研究においては、石材の獲得から石器の最終的な廃棄、あるいは現代の発掘における出土までの過程を石器の「ライフヒストリー」としてとらえ、その複雑な動態を明らかにすることが試みられてきた。その中で、破損した石器の他器種への改変や転用、刃部の再生などに関する研究も積極的に行われている。弥生時代の石器研究においてもこうした視点からの研究が行われるようになってきており、近年では磨製石器の改変・転用に際して擦切施溝分割が使用される例があることも注目されてきている。

奈具岡遺跡と同時期の弥生時代中期後半の例としては、愛知県朝日遺跡や京都府市田齊当坊遺跡などにおいて検討がなされている。朝日遺跡においては両刃石斧の破損品を素材として扁平片刃石斧を製作する場合があることや、扁平片刃石斧を擦切施溝分割によって分割して小型の扁平片刃石斧を製作する場合があることが指摘されている(石黒2000)。市田齊当坊遺跡においては、粘板岩製の石器において擦切施溝分割を用いた改変・転用例が多く認められており、石材の性質に合わせた石器の改変・転用が指摘されている。そして、それによって製作される石器は扁平片刃石斧・磨製石鏃など多様である(土屋2004)。

奈具岡遺跡の擦切施溝分割を用いた石器の改変・転用のあり方には、主に小型石斧を製作する際に擦切施溝分割が用いられる点、対象とする石材の選択性など、これらの遺跡の例と類似している点が認められる。奈具岡遺跡では火成岩などの硬質の石材で製作された両刃石斧の破損品には擦切施溝は認められていない。硬質の石材の両刃石斧は敲石などに転用されており、市田齊当坊遺跡で指摘されているのと同様に、石材の性質に合わせた転用のあり方といえるであろう。

しかしながら、これらの例と同列に考えることができない点も存在する。奈具岡遺跡では、これまでに出土している資料に剥片や未成品などがあまり認められないことから、磨製石器を多量に生産していた様子は窺えない。従って、朝日遺跡や市田齊当坊遺跡のように石器を多量に製作していると考えられる遺跡とは石器製作のあり方が異なっていた可能性がある。

この点について考える上で重要であるのは、擦切施溝分割を用いた石器の改変・転用が、奈具岡遺跡の石器製作の中でどのくらいの頻度で行われているものであったのかということである



う。奈具岡遺跡において確認された擦切施溝分割の痕跡のある石器は現状ではごく少量のみである。小型石斧などの出土量が少なく、比較資料に乏しい点に問題が残るが、現状では奈具岡遺跡の擦切施溝分割による石器製作は、石器の改変・転用を行う中で石材の質にあわせて部分的に行われていたものと解釈しておくことが妥当であると思われる。

従って、奈具岡遺跡の擦切施溝分割による石器の改変・転用例を、朝日遺跡や市田齊当坊遺跡のように石器製作体系の中に確固たる位置を占めていると考えられる例とは同じ背景の下に評価することはできない可能性が高い。奈具岡遺跡では石器の多くを外部からの供給に頼っていたこと、もしくは擦切施溝分割を用いることができる石材で製作された石器が僅少であったことなどが、擦切施溝分割が石器の改変・転用を行う中で部分的に用いられたに過ぎなかった背景として想定できるのかもしれない。

### おわりに

少数の資料ながら、奈具岡遺跡において出土した擦切施溝分割の痕跡が認められる石器について概観し、検討を行ってきた。その結果、奈具岡遺跡では破損した石器の改変・転用に際して擦切施溝分割の手法が用いられていたと考えられ、それが玉作の技術と関係していたのではないかと推測された。この推測が正しいとすれば、玉作を行っていた人々と石器生産との関わりが問題となってくる。奈具岡遺跡における玉類生産はかなり専門的であったと考えられているが(野島・河野2001)、玉作工人とも呼ぶべき人々が磨製石器の製作にも関わっていた可能性があるのである。奈具岡遺跡では擦切施溝分割は石器の改変・転用において部分的にしか行われていなかったと考えられるため、こうしたあり方は他の集落からみれば例外的なものかもしれない。しかしながら、集落内において石器・鉄器・木器など、各種の生産物がどのような体制の下に製作されていたのかを総体的に考えていくためのひとつの手がかりとなる可能性もあろう。

また、破損した石器を改変・転用すること自体が、石器・石器素材の流通や石器生産のあり方に関わる問題であると考えられる(石黒2000)。これらの点に関しても今後資料の蓄積を待って検討すべき課題である。

なお、小稿の執筆にあたっては(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、大賀克彦、小山雅人、高上拓、寺前直人、望月誠子、渡辺今日子の各氏にお世話になりました。文末ながらご芳名を記し、感謝の辞とさせていただきます。

(いしい・ともひろ=大阪大学大学院生)

注1 田代・増田1993、河野・野島1997。本来は奈具岡遺跡・奈具谷遺跡・奈具遺跡・奈具墳墓群などをまとめて奈具遺跡群とし、一つの複合的な大規模集落を形成していると理解する方が適当であると思われる。しかし、今回の再整理は奈具岡遺跡と呼称されている地区の資料を対象としているため、小稿においても奈具岡遺跡という遺跡名を使用する。

注2 河野・野島1997、第66図-1。

注3 河野・野島1997、第65図-2。

注4 田代・増田1993、第46図-4。

参考文献・報告書

- 石黒立人 2000「磨製石斧生産をめぐる覚書2000」『朝日遺跡VI-新資料館地点の調査-』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集 愛知県埋蔵文化財センター
- 河野一隆・野島永 1997「(3)奈具岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 沢田敦 2003「石器のライフヒストリー研究と使用痕分析」『古代』第113号 早稲田大学考古学会
- 下條信行 1987「東アジアにおける擦切技法について-弥生時代擦切石器の系譜-」『東アジアの考古と歴史』上 岡崎敬先生退官記念事業会
- 田代弘・増田孝彦 1993「(1)奈具岡遺跡(第4次)」『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高瀬克範 2002「日本列島北部の擦切技法」『古代文化』第54巻第10号
- 土屋みづほ 2004「市田齊当坊遺跡における石器製作」『京都府遺跡調査報告書』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 長崎潤一 2004「石器変形論」『考古学ジャーナル』No512 ニュー・サイエンス社
- 野島永・河野一隆 2001「玉と鉄-弥生時代玉作り技術と交易-」『古代文化』第53巻第4号
- 馬場伸一郎 2004「猫橋遺跡出土の緑色凝灰岩製管玉の製作工程と製作技術について」『加賀市 猫橋遺跡』一般農道整備事業(加賀中央地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

## 18. 上安久城跡

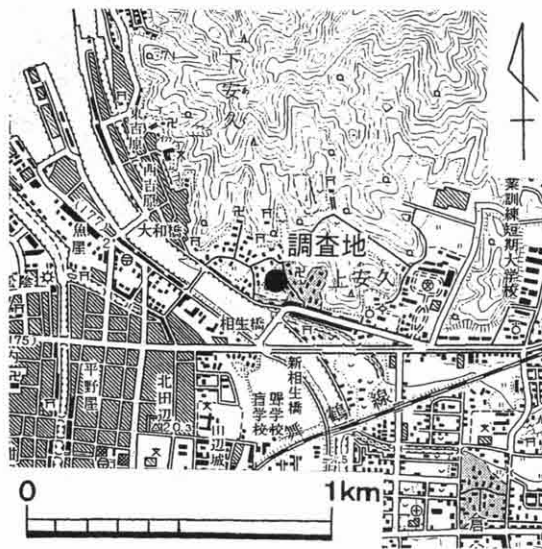
所在地 舞鶴市上安久  
調査期間 平成17年1月6日～3月3日  
調査面積 約330m<sup>2</sup>

はじめに 上安久城跡は、伊佐津川右岸の独立丘陵上に営まれた中世山城跡である。安久氏の居城跡と伝えられている。今回、城跡の範囲に臨港道路の建設が計画されたため、記録を作成・保存することを目的として発掘調査を実施した。

**調査概要** 調査に先立ち、対象地内の立木を伐採した。伐採木を整理した後、測量用基準点を設置した。調査地内には、テラス状の平坦面が5か所確認された。この平坦面は、郭として江戸時代以前に構築されたと推定されるものである。それぞれにトレンチを設定し、西側から順に第1～5トレンチと名づけた。調査の結果は以下の通りである。第1トレンチは、城跡の西端にあたる郭状の平坦面に設けた。表土下50～60cmで平坦に造作された地山が認められた。斜面を削平して形成した郭と考えられる。第2トレンチは、丘陵の西斜面に伊佐津川を挟んで田辺城跡に面する急斜面に認められた平坦面に設けた。急斜面に多量の土砂を盛って形成された郭であることが明らかとなった。第3トレンチは、主郭と推測される丘陵頂部平坦面の北端にあたる緩傾斜地に設定した。トレンチ北東端斜面で垂直に造作された遺構を確認した。これは、第4トレンチで確認した郭との連結部分に設けられた遺構の一部と考えられる。第4トレンチは、丘陵東側に向けて形成された平坦面に設けた。東斜面裾で、幅約2m、深さ約1.5m前後の溝を確認した。地山整形による郭であることが判明した。

まとめ 今回の調査により、調査対象地内に認められた5か所のテラス状の地形のうち、第1～4トレンチについては、造成されたものであることが判明し、城を構成する郭であることを確認することができた。第5トレンチについては、今後第4トレンチ隣接地点の斜面部や北側斜面などについて調査を進めることにより、性格を明らかにできるものと期待される。城の築造時期については戦国時代頃と推定されているが、出土遺物に乏しく、遺物の上から築造年代を明らかにするには至らなかった。

(田代 弘)



調査地位置図(国土地理院1/25,000舞鶴)

## 19. 馬路遺跡第4次

所在地 亀岡市馬路町六反田  
 調査期間 平成16年12月7日～平成17年2月27日  
 調査面積 1,570m<sup>2</sup>

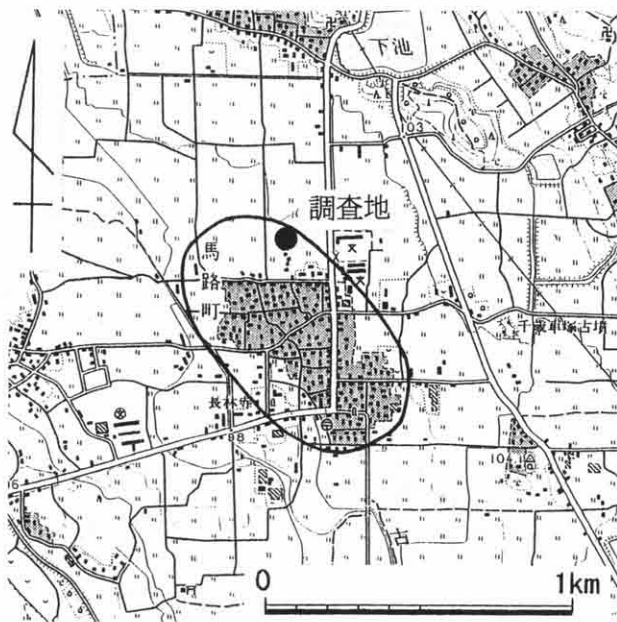
はじめに 調査は、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受け実施した。馬路遺跡は、低段丘上にある馬路の集落や北部に広がる田畑部を囲む形で広がっており、遺跡範囲は東西約700m、南北約800mを測る(第1図)。これまでの調査によって、弥生時代～中世にわたって営まれた遺跡であることが判明している。

調査概要 今回の調査は、集落の北部に広がる田畑部の東側において、平成15年度調査区(A・B地区)に隣接した地点(E・F・G地区)で調査を実施した(第2図)。

E地区では、飛鳥時代の竪穴式住居跡1基や溝、土坑などの遺構を検出した。溝S D01は、A地区で検出した東西溝の西側延長部にあたる。溝S D06・14・19は同じくA地区で検出した3条の南北溝の北側延長部にあたる。

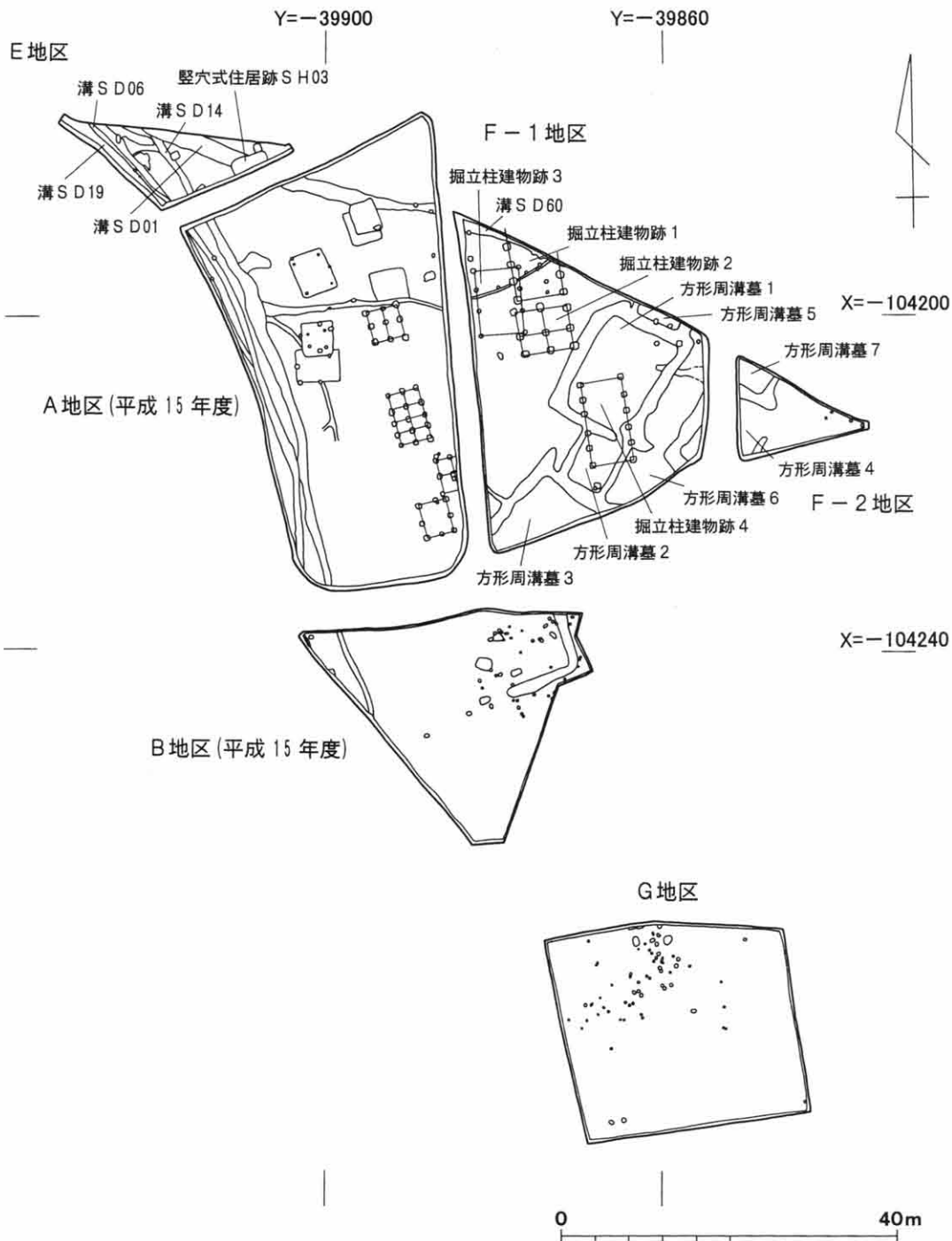
F-1地区では、南北方向に建てられた奈良時代末～平安時代の掘立柱建物跡4棟や弥生時代中期の方形周溝墓、A・E地区から続く東西溝と思われる溝S D60、土坑などを検出した。方形周溝墓の周溝は、一部途切れるものの墳丘のほぼ全周をめぐり、隣接する墳丘と溝を共有している。F-2地区では、方形周溝墓やピットなどを検出した。

また、B地区の南側で設定したG地区では、遺構の密度は希薄であったが、焼土坑や土坑、柱穴などを検出した。出土遺物も少量で、時期や用途については不明である。



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)

まとめ E地区では、A地区で検出した竪穴式住居跡群と同じ主軸方位をもつ竪穴式住居跡や溝などを検出し、北側への遺構の広がりを確認した。F地区では、同じくA地区で検出した掘立柱建物跡とは異なる方位をもつ掘立柱建物跡を4基検出した。これらの掘立柱建物跡群は、その構造や建物配置から倉庫群であった可能性も考えられる。また、弥生時代では方形周溝墓7基などを検出し、遺跡の北東側において方形周溝墓を主体とする墓域が展開することが確認できた。G地区では、遺構は希薄ではあるが、時期不明の遺構を検出した。これ



第2図 調査地区遺構配置図

らはB地区南側の調査結果と同様に、後世の削平によって遺構が著しく削り取られ消失しているためと考えられる。

今回の調査区での遺構の検出状況から、さらに北側や東側にも遺構が広がっていることが想定できる。今後、平成15年度調査区の調査成果を含めて遺跡の性格などの検討を進めるとともに、遺跡範囲についても再検討する必要がある。

(村田和弘)

## 20. ときづか 時塚遺跡第10次(G～J地区)

所在地 亀岡市馬路町滝ヶ元・時塚・筋違  
調査期間 平成16年12月1日～平成17年2月27日  
調査面積 約4,120m<sup>2</sup>

はじめに 当遺跡は、亀岡市馬路町と千歳町に広がる遺跡で、東西約800m、南北約600mを測る。今までの調査の結果、縄文時代中期末の土坑・弥生時代中期後半の竪穴式住居跡や方形周溝墓・古墳・奈良～平安時代の柱穴群などを確認している。今回の調査地は、G～J地区である。

調査概要 G地区では、弥生時代中期の柱穴群や土坑、時塚1号墳の周溝を確認するとともに、平安時代後期の井戸や柱穴などの遺構も確認した。柱穴群は、直径0.2m前後で密に設けられ、弥生時代中期の住居跡と考えられる。時塚1号墳は、一辺約27mの方墳である。造り出しには多くの鉄器が副葬された埋葬施設を1基確認するとともに、周溝からは盾持ち人形埴輪が出土した(第6次調査)。今回は、古墳の南隅を検出したが、埴輪は出土しなかった。周溝の規模は幅約6m、深さ約0.9mを測る。井戸は、調査地中央と東端から2基検出した。中央の井戸は一辺約2.8mの方形で、黒色土器や土師器が出土した。また東端の井戸は直径1.5mの円形で、井戸の底に人頭大の石を円形に組んでいた。井戸の埋土中から緑釉陶器片が出土した。

H地区からは、方形周溝墓5基と掘立柱建物跡2棟を検出した。方形周溝墓の規模は5～10mで、溝内から弥生時代中期後半の土器片が出土した。周溝内に、埋葬施設を1か所認めた。掘立柱建物跡については、調査地外にのびるため、その規模については不明である。

I地区からは、弥生時代中期後半の方形周溝墓10基、掘立柱建物跡3棟と平行する溝2条を確認した。方形周溝墓群は、5～10m四方で大きく西に振る形で築かれ、C・H地区で検出した方形周溝墓群と大きく異なる。H地区の方形周溝墓とは一定の距離があることから、別の一群と考えられる。掘立柱建物跡は、調査地の北端で検出した。調査地外にのびることから、全容については不明である。また、平行する溝2条を確認した。溝の主軸方向はN45°Wと大きく傾き、溝間の距離は約5mを測る。遺構内から出土遺物はなく、その性格・時期については不明である。

J地区からは、弥生時代中期の方形周溝墓4基・土坑・溝、中世の溝・土坑・柱穴を検出した。方形周溝墓の大半は調査地外に広がる。4基のうち2基は、確認規模7.5×9m以上、4.2×8.4mの長方形を呈し、周溝の深さ約0.4mを測る。2基は周溝の一部のみ検出したもので、溝内から弥生時代中期の壺などが出土した。楕円形土坑から出土した中期の壺については土器棺の可能性はある。溝は、弥生時代と鎌倉時代のものがある。

まとめ 今回の調査は、今までの調査成果に追加する形となった。弥生時代中期には遺跡の北側にあたるA地区付近は竪穴式住居跡が認められ居住域として、また、C地区以南からは方形周溝墓群を検出したことから墓域として利用していたことがわかった。方形周溝墓の主軸の異なり





調査地および主要遺構配置図

から、C～H地区とI地区の方形周溝墓群の大きく2つの群が存在すると考えられる。時塚遺跡北端にあたるJ地区は、池尻の集落に続く低位段丘上に立地する。ここで検出した方形周溝墓群に対応する集落は、池尻の集落付近に求められ、時塚遺跡のA～I地区と立地面で異なる。以上のことから、時塚遺跡は弥生時代中期に大きく展開する集落遺跡で、段丘上には竪穴式住居跡や方形周溝墓がまだ存在すると考えられる。

(岡崎研一・黒坪一樹)

21. <sup>ながおかきょう</sup>長岡京跡右京第825・840～842次、  
<sup>ともおか</sup>友岡・<sup>いがじ</sup>伊賀寺・<sup>しもかいいんじ</sup>下海印寺遺跡

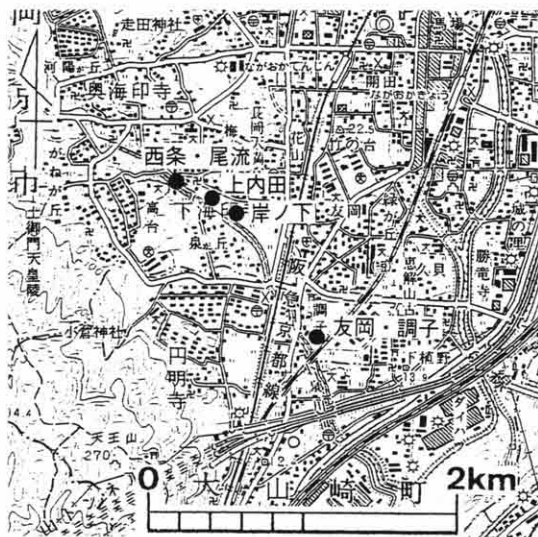
所在地 長岡京市友岡川原・六本木、調子八角、下海印寺岸ノ下・上内田・西条・尾流  
 調査期間 平成16年7月5日～平成17年2月25日  
 調査面積 4,030m<sup>2</sup>

はじめに 国土交通省近畿地方整備局は、京都西南部の交通事情の改善のため、京都第二外環状道路の建設を計画した。同道路は、大山崎町から長岡京市域を北上し、京都市域に至るものである。同道路建設予定地には、長岡京跡、友岡・伊賀寺・下海印寺遺跡が分布しており、それらの遺跡の実態を見極めるため、平成15年度より試掘調査を実施している。平成16年度の調査は、友岡・調子地区、岸ノ下地区、上内田地区、西条・尾流地区で実施した。

調査概要 友岡・調子地区は、長岡京跡では右京八条三坊四～六町、九条三坊一・二町に位置する。同地区には、縄文～鎌倉時代の集落跡である友岡遺跡が所在している。

友岡・調子地区では15か所のトレンチを設定したが、全域が旧小泉川の氾濫源にあっており、顕著な遺構・遺物を検出できなかった。各トレンチは、現地表下50～70cmで小泉川の砂礫となり、その上位には瓦器片・輸入陶磁器片が混じる、田畑の整地土が堆積していた。唯一、現調子集落近傍に位置するE地区では、平安時代に遡る溝跡を確認した。この時期にまで遡る遺構の確認は、友岡・調子地区では初めてであり、平安時代にまで遡る遺構が調子集落の周辺に存在する可能性が高い。

岸ノ下地区は、長岡京跡右京八条四坊一町、西三坊大路に位置する。同地区には、古墳時代後期から鎌倉時代の集落跡である伊賀寺遺跡が所在する。



第1図 調査地位置図  
 (国土地理院1/50,000京都西南部)

岸ノ下地区では2か所のトレンチを設定して試掘調査を行ったが、顕著な遺構はなく、中世以後の田畑整地土を確認したに留まった。ただし、中世以降の耕作土内から緑釉陶器片が出土しており、周辺に想定されている伊賀寺遺跡との関連が注目される。

上内田地区は、長岡京跡右京七条四坊五・十二町、西四坊坊間小路に位置する。同地区には、岸ノ下地区と同じく、伊賀寺遺跡の範囲に含まれている。

調査トレンチは8か所を設定して行った。各トレンチでは、古墳時代中期末～後期初頭と判断される竪穴式住居跡や流路跡・溝跡を検出した。試掘結果を総合すると、道路予定対象地の北側はやや微高地となっており、この北側の一帯に同時期の集落が分布しているものと推定される。この集



第2図 西条・尾流地区全景(上が南南西)

落に南接する位置は低湿地となっており、小泉川がこの近傍に流れていたと推測される。この小泉川に向けて、数条の流路が流れ込んでいる。

尾流・西条地区は、長岡京跡では右京七条四坊十四町、西京極大路に所在する。縄文時代を主体とする下海印寺遺跡、長岡京の祭祀場として著名な西山田遺跡に隣接する。

西条地区は小泉川の北西側の微高地に位置しており、試掘トレンチのほぼ全面で柱穴を検出した。柱穴からの遺物の出土は少なく、明確な時期は分からないが、奈良～平安時代のものと判断される。包含層中より古墳時代の遺物が出土しており、近辺に同時代の遺構が分布している可能性もある。

尾流地区は現小泉川に面しており、西条地区より一段低い位置にある。4か所の試掘坑を設けて調査を実施した。調査の結果、弥生土器～古代における須恵器・土師器が大量に出土し、土坑・溝・柱穴などの遺構も検出した。また、弥生時代の土坑のベースとなる層中には、縄文土器と判断される土器片が含まれていた。このように、下海印寺遺跡の拡がり尾流地区一帯にまで及んでいることが判明した。

まとめ 平成16年度は4地区で試掘調査を実施した。上述のように、友岡・調子地区では顕著な遺構を確認できなかったが、南端に位置するE地区では、平安時代に遡る溝跡が確認されており、この周辺に同時代の遺構・遺物が稠密に包蔵されている可能性が認められた。岸ノ下地区は、中世以前には小泉川旧流路およびその氾濫源にあたっており、中世以後に田畑として土地利用が開始されている。

上内田地区では、古墳時代の集落跡と流路跡、西条・尾流地区では、弥生時代から古代における集落跡が包蔵されていることが確認でき、周辺には広範囲に遺構・遺物が分布していることが判明した。今後、この周辺地域の開発に際しては、より綿密な発掘調査が必要となろう。

(岩松 保)

## 22. 内田山<sup>うちだやま</sup>B 1号墳・内田山遺跡

所在地 相楽郡木津町大字木津小字内田山  
 調査期間 平成16年12月1日～平成17年2月17日  
 調査面積 約500m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて実施したものである。調査地は、JR木津駅のほぼ真東、西に向かっている丘陵のほぼ先端に位置する。調査地からは、木津町の平野部を一望することができる。今回の調査の対象となった内田山B 1号墳と内田山遺跡の調査は、これまでに4回行われている。これまでの調査で、B 1号墳の一部を確認するとともに、弥生時代後期の土器溜まりを検出し、周辺に弥生時代後期の遺構が重複している可能性が高いと考えられた。今回の調査は、B 1号墳の全面的な調査を実施し、合わせて弥生時代の遺構・遺物の検出を行った。

**調査概要** 内田山B 1号墳は、南側が大きく削平されているものの方墳であることが確認できた。規模は、墳丘裾で東西長17.5mであるが、南北長は削平のため不明である。古墳の主軸は北に対して30°東へ振る。墳丘は大きく削平されており、段築の有無は不明である。また、墳頂部では現地表面から10cmほどで、埋葬施設を検出した。なお、葺石はなかったと考えられる。

周溝は、削平の著しい南辺を除く、東・北・西の各辺で確認しており、本来は全周するものと考えられる。周溝の検出幅は3.0～4.1m、深さは0.4～0.6mである。いずれの周溝からも多数の埴輪と少量の弥生土器・土師器・須恵器・瓦が出土した。出土した埴輪としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪・盾形埴輪などの器材埴輪、家形埴輪などがある。このうち、蓋形埴輪が比較



調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)

的遺存状態が良好で、3ないし4個体存在したと考えられる。これらの埴輪は墳丘の削平に伴って、周溝内に転落したものと考えられる。円筒埴輪は、全容をうかがい知ることのできるものはほとんどないが、外面調整にヨコハケを施し、スカシ穴は円形に限られるようである。また、黒斑が見られる。

埋葬施設は、合計4基検出した。主体部1・2は平成11年度の調査で検出した。主体部1(S X01)は、特製棺を埋納したものである。副葬品として滑石製の棗玉や白玉などの玉類が180点出土した。主体部2(S

X02)は、普通円筒埴輪を棺に転用したもので、副葬品はなかった。

主体部3・4は今回の調査で検出した埋葬施設である。主体部3は、全長3.7m、幅1.1mの墓壇の内部に全長3.3m、幅0.5mの木棺を埋納していた。木棺の内部は、大きく3つの空間に分けられ、被葬者が埋葬されていた中央部分に限って礫が敷き詰められていた。礫床の北東寄りには蓋形埴輪の立ち飾りや軸受け部を折り重ねて、被葬者の枕としていたと考えられる。副葬品としては、枕の北東側から刀子1点が出土した。刀子は全長14.9cm、幅1.6cmである。なお、主体部3の枕に転用されていた蓋形埴輪は、立ち飾りの文様などから周溝内出土埴輪よりも古相の特徴を有する。

主体部4は、全長2.95m、幅1.1mの墓壇の内部に全長2.45m、幅0.5mの木棺を埋納していた。木棺の内部は、大きく2つの空間に分けられる。木棺の内部は、淡いピンク色に変色した土が広がることから、朱が塗られていたと考えられる。木棺の北東寄りには高杯の杯部が置かれており、被葬者の枕としていたと考えられる。副葬品としては、木棺の中央部分から青銅鏡(六獣形鏡)1面が出土した。六獣形鏡は、直径14.0cm、鏡面から鈕の頂部までの高さ1.2cmである。鈕座は、鈕の周りに2本の圈線がめぐり、圈線の間には珠文が見られる。内区は、6個の円圈乳座を配し、その間に6つの獣形をおいている。獣形はいずれも右向きで、鳥のような頭と「V」字形の嘴様のものをもつ。首は細長く、「鳥首」もしくは「鳥頭」と呼ばれるものである。外区は鋸歯文・珠文・鋸歯文と続く。周縁は幅1cmほどの平縁に近い斜縁である(巻頭図版参照)。鏡の特徴から古墳時代中期前葉のもの<sup>(注)</sup>と推定される。

このほかに、今回の調査ではB1号墳に重複して弥生時代後期の竪穴式住居跡1基、土坑2基などを検出した。出土した遺物は破片が多く、詳細は不明だが、以前の調査で出土した弥生土器などから、弥生時代後期中葉頃のものと考えられる。

まとめ 内田山B1号墳は、出土した六獣形鏡や円筒埴輪、蓋形埴輪などの特徴から、古墳時代中期前葉に築造されたものと考えられる。埋葬施設は合計4基検出されたが、検出位置や規模などから、主体部3が築造当初に伴う埋葬施設と考えられ、ほかの3基については、追加埋葬されたと考えられる。埋葬施設の構造はそれぞれ異なるが、埴輪(主体部3)や土器(主体部4)を転用して枕としたり、木棺に礫床(主体部3)を設けたりするのは、日本海側の北近畿地方や山陰地方にみられる特徴で、被葬者とこれらの地域の間に何らかのつながりがあったことが考えられる。また、内田山B1号墳の下層から、弥生時代後期の竪穴式住居跡を検出し、内田山遺跡が弥生時代後期の集落遺跡であることが確認できた。

(筒井崇史)

注 内田山B1号墳出土六獣形鏡については、当調査研究センター前理事長樋口隆康氏および大阪大学助教授福永伸哉氏よりご教示を得た。



府内遺跡紹介

102. <sup>ながおかきゅうほうどう</sup>長岡宮宝幢跡

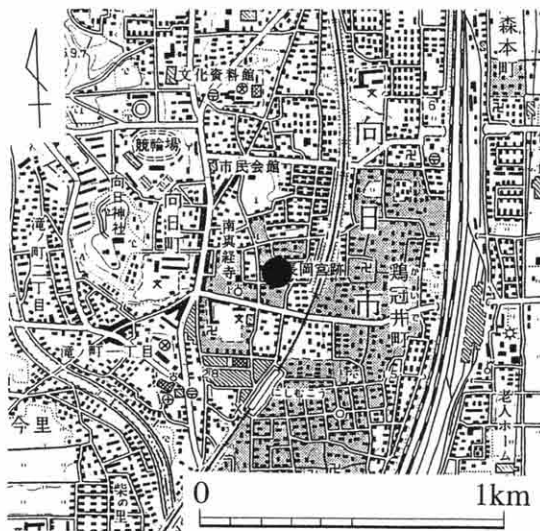
遺跡紹介ではこれまでに長岡宮跡大極殿跡や築地跡を取りあげてきた。今回は、最近、公園整備が行われた宝幢跡について紹介したい。

宝幢とは古代の中国で行われた儀式用の旗飾りのことで、「青龍」「朱雀」「白虎」「玄武」の方位を表す四神を描いたのぼり旗と「鳥形」「日像」「月像」の飾り物を、長さ7～9mの7本の大柱(旗竿)の上に飾り付け、儀式の場に翻させたものである。

日本では、国家の制度が整えられた奈良時代以来、天皇の即位と元旦朝賀の特別な儀式に際し、威儀を整えるために大極殿や朝堂院に建てられた。平城宮跡では、1983年に大極殿跡の前面で宝幢遺構がみつまっている。

長岡宮跡では、1997年の調査で3基、2004年の調査で2基の宝幢遺構が宮の中心建物である大極殿跡の前庭でみつかった。宝幢は大極殿の中軸線を中心に左右計7本建てられるもので、平安時代に編修された『延喜式』の記載から、1997年の検出のものは東側の日像・朱雀・青龍、2004年の検出のものは、西側の玄武・白虎の各幢に相当するものと考えられる。

宝幢遺構の検出位置は、大極殿の基壇南端から29.6m(約100尺)を測る。東西方向に心々距離が6m(約20尺)間隔で一直線に整然と並んでおり、調査されていない鳥形・月像の残り2幢の位置もほぼ確定できる。みつかった宝幢の柱掘形は、平面が東西に長い楕円形ないし箱形の土坑(穴)で、長さ約4～5m、幅約1m、深さ約0.5～1.2mを測る規模の大きなものである。掘形の中央には大柱と、それを支える両側の柱(添柱)穴の跡が確認されている。玄武坑の調査では、数回にわたる柱の抜き取り痕がみつかっており、儀式に際して同じ場所で繰り返し建てられたことが判明している。



第1図 大極殿公園の位置  
(国土地理院1/25,000京都西南部)

『続日本紀』によると、桓武天皇は平城京で即位の式を行い、785・792・793年の計3回、元旦朝賀の儀式を行ったとされている。長岡宮では天皇の即位はなかったので、この宝幢跡は朝賀の際に使用されたものと考えられている。

宝幢跡は、調査後埋め戻されたが、本年2月に長岡京発掘50年を記念して、向日市の史跡公園整備の一環として玄武・白虎の2基が復原された。全体の復原は難しいため、地上から3m分の大柱とそれに横木を渡し両側から支える支柱を再現したものである。大柱の直径は30cmあり、古代の



姿に近づけるため、柱の表面はヤリガンナを使って仕上げられた。

機会がありましたら、大極殿公園の南側に復原された宝幢を訪ねられ、頭上高く朝日を受けて輝き、風にはためく姿を思い描かれてみてはいかがでしょうか。

大極殿公園(向日市鶏冠井町祓所)へは、阪急西向日駅の西



第2図 旧の位置に復原された宝幢(左玄武、右白虎)

口を出て、北に約5分。駅のすぐ北側には、長岡京跡発掘の端緒となった会昌門跡(現在の呼称は長岡宮朝堂院南門)の石碑、東側には、朝堂院西第四堂跡の位置を示す芝貼りの土壇が公園として遺されている。

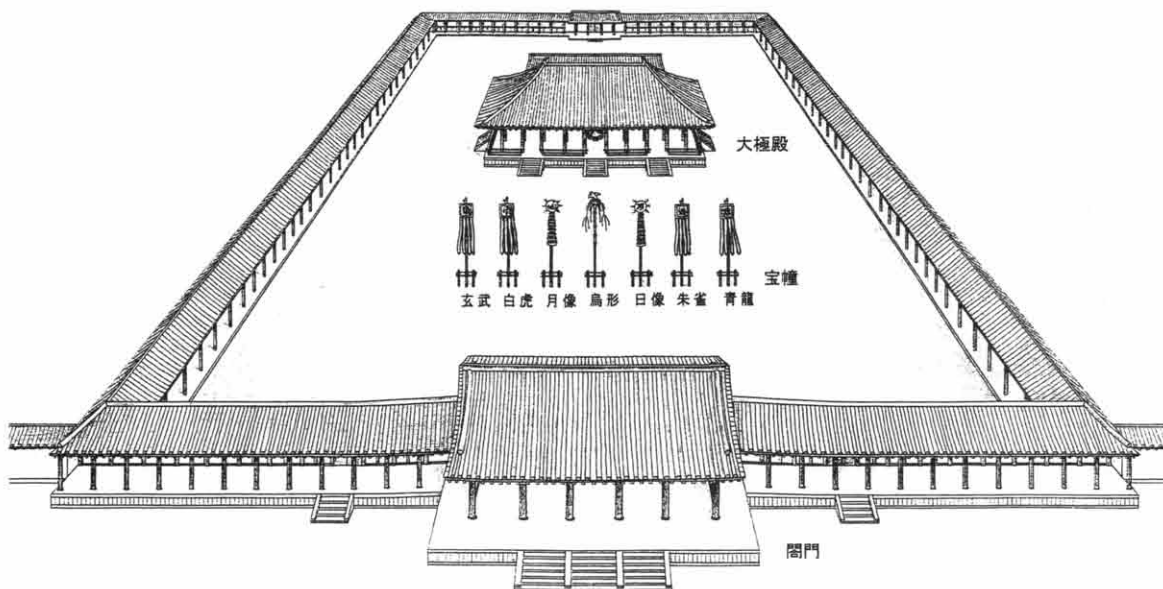
(辻本和美)

#### 参考資料

國下多美樹「長岡宮跡第430次(7ANEHJ-10)～大極殿前庭(宝幢跡)、乙訓郡衙跡、山畑古墳群～発掘調査略報」(『向日市埋蔵文化財調査報告書第63集』向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター) 2004

(財)向日市埋蔵文化財センター『長岡宮跡第430次調査「長岡宮大極殿宝幢(白虎・玄武坑)現地説明会資料」 2004.2.14

(財)向日市埋蔵文化財センター『永都 Vol. 6 (元旦朝賀になびく旗竿—長岡宮宝幢跡)』 2005、第3図の宝幢配置イラストは、(財)向日市埋蔵文化財センター所蔵。



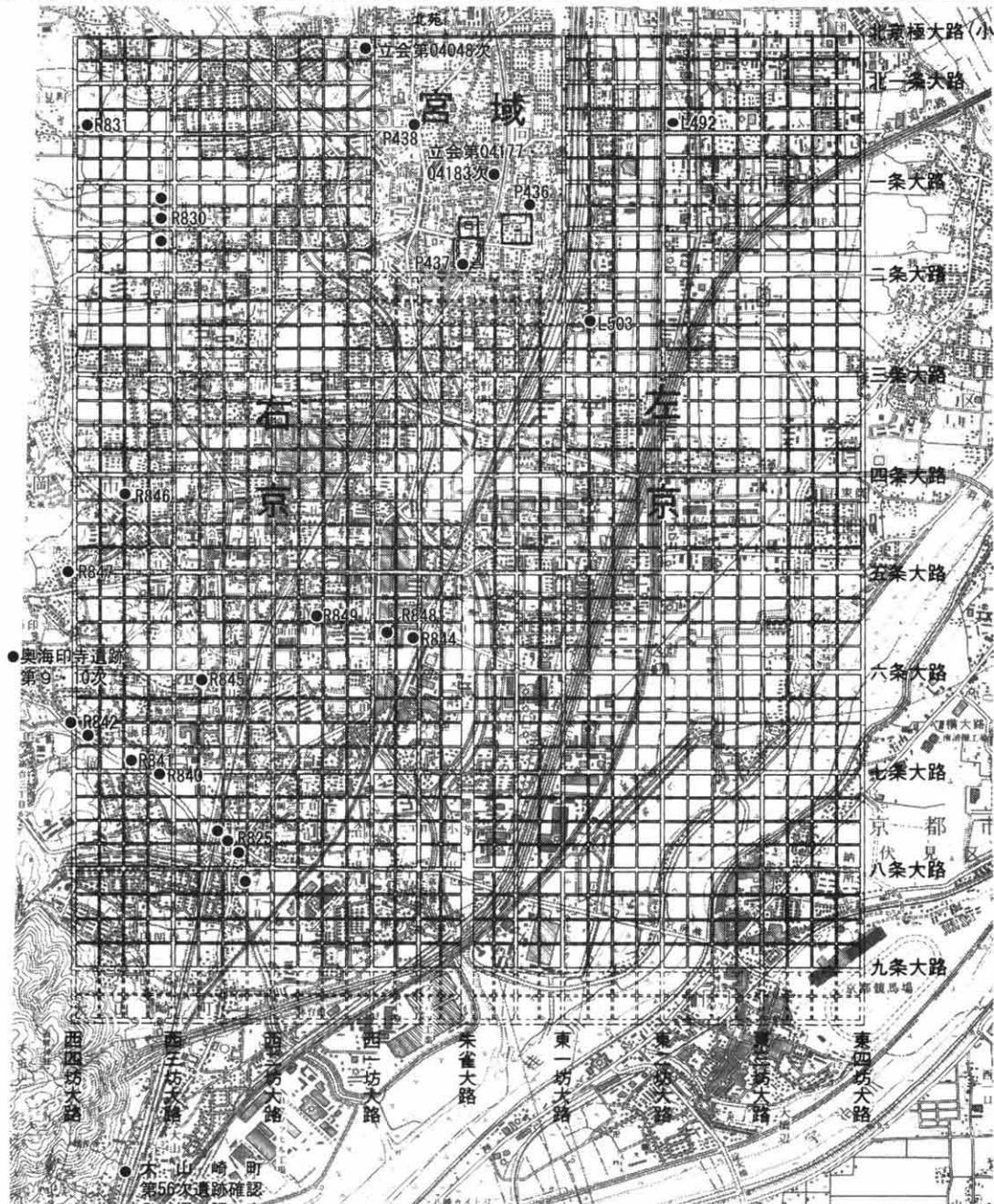
第3図 大極殿前庭の宝幢配置イラスト((財)向日市埋蔵文化財センター『永都』Vol. 6 から転載)

## 長岡京跡調査だより・93

長岡京連絡協議会の平成17年1月26日と2月23日、3月23日の月例会では、宮内4件、左京域3件、右京域13件の調査について報告があった。京域外の3件を併せると合計23件となる。

### 長岡京跡発掘調査抄報告

**宮域** 朝堂院南面回廊の構造を探る目的で実施された宮第437次調査では、朝堂一大極殿中軸上に開く門(朝堂院南門)の西に続く回廊が、院西南隅にまでのびることなく楼阁状建物で閉じて



調査地位置図

(向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数次は次数を示す。

いることが分かった。つまり、南門西側において、回廊主軸と直交する方向の凝灰岩地覆石と、それに連なる地覆石抜取痕跡、柱間約17尺を測る礎石据え付け穴2か所の存在などから、柱間8尺等間の2間×2間の建物が南門両側に翼廊状に存在し、これを挟んで南面遮蔽施設が回廊から築地に変化する可能性が指摘されるに至った。

**左京域** 8月に現地調査が終了した左京第492次調査では、東二坊大路東側溝やそれに平行する築地内溝出土の多量の遺物整理が進む中で、7世紀後半の須恵器蓋の内面に「長罫□」（「罫」は「岡」の異体字）の墨書が確認され話題をよんだ。「長岡」を表記した出土文字原資料としては最も古いもので、都城造営以前の地名諺や起源などを知るうえで重要な発見といえる。

**右京域** 京域の南西部において道路建設にともない広域に調査している右京第825・840～842次調査では、試掘の段階ではあるが、各所で一定の成果が上がっている。中でも、友岡・調子地区(第825次)では、埋土下層に13～14世紀の瓦器碗や土師器皿を多量に含む幅5m以上の流路や、ミニチュア竈・土馬などの祭祀具が出土する包含層が確認され、西寄りの下内田地区(第841次)では、小泉川北岸に形成された古墳時代中期の集落(竪穴式住居跡など)とその縁辺の流路状遺構から加工木や完形の土器類などが多量に出土した。最も西側の尾流・西条地区(第842次)では、弥生時代後期の集落遺構が2か所検出され、土器類に混じってチャートや碧玉の剥片・石核が出土した。大原野石見遺跡と重複する右京第831次調査では、中世の屋敷遺構の下層で、長岡京期の掘立柱建物跡や古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などが確認された。なお、長岡京条坊に関連する遺構が全く確認されないということが分かった。弥生時代後期の環濠を有する集落遺跡として著名な長法寺遺跡(右京第846次)では、集落遺構が確認されている地区の隣接地において、環濠の延長部が良好な状態で検出された。幅3m前後の断面「V」字型を呈し、逆茂木の存在を想起させる小ピットが溝底付近で多数確認された。溝内埋土下層を中心に石器を含めた多数の土器類が出土し、搬入土器(瀬戸内系・近江系・生駒西麓産など)も一定量含まれ当地区の弥生後期研究に貴重な資料を提供した。右京第847次調査(下海印寺遺跡)では、奈良時代および鎌倉時代の掘立柱柱穴が多数検出された。中でも奈良時代の建物は規模が大きく、柱筋は正方位北に対してやや西に振る傾向がある。周辺の調査区においても同様の大型掘立柱建物跡が検出されており、長岡京設定以前の一般集落とは区別すべき施設が存在したことを暗示する。

**京域外** 大山崎町第56次遺跡確認発掘調査では、平安時代前期の瓦窯(仮称：大山崎瓦窯)が新たに複数まとまって発見され注目を集めた。いずれもロストルをもつ平窯で、6基の窯が隣接するように整然と配置されていた。窯の特徴としては、焚口の両側に瓦積を施して前庭部奥壁の擁壁を兼ねた化粧を施し、その化粧ラインが東に開口する複数の窯を越えて直線状に揃う点に窯構築の計画性の高さが窺われる。また、分焰柱の形態が平瓦2枚を凹面同志合わせて柱を作るタイプ(古)と、畝の上に直接隔壁が載るタイプ(新)が混在するといった時間的な変遷も明らかとなった。これまでの出土瓦の検討により、当瓦窯は、平安時代前期の官窯のなかで、西賀茂瓦窯での瓦生産を補完する形で、延喜年間に岸辺瓦窯とともに造瓦活動を開始し、後の岸辺や西賀茂(上庄田瓦窯)への収斂に伴い造瓦活動を終えた可能性が指摘された。(伊賀高弘)

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成17年4月1日現在)

**理事長**

上田 正昭  
(京都大学名誉教授・京都府文化財保護審議会  
会長)

**副理事長**

中尾 芳治  
(恭仁宮跡調査専門委員会委員長)

**常務理事**

増田 耕造

**理事**

石野 博信  
(徳島文理大学教授・香芝市二上山博物館館  
長)

井上 満郎  
(京都産業大学文化学部教授)

都出比呂志  
(大阪大学名誉教授)

中谷 雅治  
(元京都府教育庁指導部理事・文化財保護課  
長)

高橋 誠一  
(関西大学文学部教授)

増田富士雄  
(京都大学大学院理学研究科教授)

上原 真人  
(京都大学大学院文学研究科教授)

下田 元美  
(京都府府民労働部文化芸術室長)

宮野 文穂  
(京都府教育庁指導部長)

小池 久  
(京都府教育庁指導部文化財保護課長)

**監事**

泉谷 隆信  
(京都府出納管理局長)

池田 博  
(京都府教育庁管理部長)

**事務局長**

総務課  
課 長  
総務係長  
主任  
専門調査員

増田 耕造  
安田 正人  
杉江 昌乃  
今村 正寿  
橋本 清一

(府立山城郷土資料館へ派遣)

主 査  
主 事  
課 長

北邑 靖史  
鍋田 幸世  
森下 衛

**調査  
第1課**

課長補佐  
企画係長  
主査調査員  
資料係長  
主任調査員

水谷 壽克  
水谷 壽克(兼)  
伊賀 高弘  
辻本 和美  
田中 彰

**調査  
第2課**

課 長  
総括調査員  
課長補佐  
調査第1係長  
次席総括調査員

長谷川 達  
小山 雅人  
奥村清一郎  
小池 寛  
伊野 近富

主任調査員  
専門調査員  
調 査 員

引原 茂治 森島 康雄  
岡崎 研一 黒坪 一樹  
石崎 善久 筒井 崇史  
福島 孝行

調査第2係長  
主任調査員

奥村清一郎(兼)  
松井 忠春 田代 弘

専門調査員  
調 査 員  
調査第3係長

中川 和哉  
石尾 政信  
高野 陽子 村田 和弘  
石井 清司

主任調査員

戸原 和人 竹原 一彦  
増田 孝彦 岩松 保

専門調査員  
主査調査員

竹井 治雄  
柴 暁彦

センターの動向(05.02~04)

1. できごと

2. 2 石野博信理事内田山B 1号墳ほか  
現地視察
- 4 中谷雅治理事池尻遺跡第7次現地  
視察
- 5 椿井遺跡(山城町)現地説明会
- 6 池尻遺跡第7次D地区現地説明会
- 7 平成16年度人権に関する職場研修  
(於：京都府乙訓総合庁舎)辻本和美  
資料係長、田中彰・中川和哉主任調  
査員、石尾政信・黒坪一樹専門調査  
員、北邑靖史主査、柴暁彦調査員、  
鍋田幸世主事参加  
井上満郎理事池尻遺跡第7次現地  
視察
- 8 中尾芳治副理事長椿井遺跡ほか現  
地視察
- 9 椿井遺跡発掘調査終了(9.21~)
- 10 平成16年度第2回全国埋蔵文化財  
法人連絡協議会近畿ブロック主担者  
会議(於：大阪市)小山雅人調査第2  
課総括調査員、水谷壽克調査第1課  
課長補佐出席
- 14 長岡京跡右京第840次(第二外  
環)(長岡京市)発掘調査終了(11.16  
~)
- 15 教育関係法人職員合同研修会  
(於：京都市考古資料館)杉原和雄事  
務局長、安田正人総務課長、長谷川  
達調査第2課長、小山雅人調査第2  
課総括調査員、水谷壽克調査第1課  
課長補佐、杉江昌乃総務係長、今村  
正寿総務課主任出席
- 17 内田山B 1号墳(木津町)現地説明  
会  
大垣・一の宮遺跡(宮津市)発掘調  
査終了(9.15~)  
岡田康博文化庁記念物課文化財調  
査官池尻遺跡第7次現地視察
- 18 職員研修(於：向日市文化資料館)  
講師：岡田康博文化庁記念物課文化  
財調査官「近年の埋蔵文化財保護行  
政の動向」  
市町村史跡・埋蔵文化財保護行政  
担当者会議(於：京都府庁)水谷壽克  
調査第1課課長補佐、石井清司調査  
第2課調査第3係長出席
- 20 第101回埋蔵文化財セミナー(於：  
長岡京市立中央公民館市民ホール
- 21 難波野条里制遺跡(宮津市)発掘調  
査終了(9.15~)
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 24 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック役員会議(於：京都文化  
博物館)杉原和雄常務理事・事務局  
長、安田正人総務課長出席
- 25 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック事務担当者会議(於：大  
阪市)安田正人総務課長、杉江昌乃  
総務係長出席  
内田山古墳・内田山遺跡(第5  
次)(木津町)発掘調査終了(12.1~)  
長岡京跡右京第825次(第二外  
環)(長岡京市)発掘調査終了(7.5~)



- 25 長岡京跡右京第841次(第二外環)(長岡京市)発掘調査終了(12. 2～)
- 27 平成16年度国営農地関係遺跡(亀岡市)現地説明会
3. 1 長岡京跡右京第830次・井ノ内遺跡(長岡京市)現地説明会
- 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪歴史博物館)小山雅人調査第2課総括調査員、森島康雄主任調査員出席  
池尻遺跡第7次(亀岡市)発掘調査終了(10.25～)  
時塚遺跡第10次(亀岡市)発掘調査終了(12. 1～)  
馬路遺跡第4次(亀岡市)発掘調査終了(12. 7～)  
車塚遺跡第7次(亀岡市)発掘調査終了(12.13～)  
上安久城跡(舞鶴市)発掘調査終了(1. 6～)
- 8 長岡京跡右京第830次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査終了(7. 26～)
- 18 職員研修(於：当センター)「人権研修」
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 24 第73回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、杉原和雄常務理事・事務局長、都出比呂志、中谷雅治、高橋誠一、上原真人、下田元美、奥野義正、小池久各理事、奥田登志男、池田博各監事出席
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 27 職員研修(於：当センター)「人権研修」
- 31 退職職員辞令交付(別掲)
4. 1 常務理事、事務局長就任(別掲)昇任・異動職員辞令交付
- 7 車塚遺跡第7次B地区(亀岡市)発掘調査開始
- 15 職員人権研修(於：当センター)
- 18 椿井遺跡第2次(山城町)発掘調査開始
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 27 職員人権研修(於：当センター)
- 2. 普及啓発事業**
2. 20 長岡京発掘50年記念事業・第101回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市立中央公民館市民ホール)『京都三都物語—恭仁宮・長岡京・平安京—』：山田邦和花園大学文学部教授「記念講演；日本古代都城研究の展望」、奈良康正京都府教育委員会技師「恭仁宮の調査成果について」、中島信親向日市埋蔵文化財センター技師「長岡宮の調査成果について」、石井清司当センター調査第3係長「長岡京の調査成果について」、網伸也京都市埋蔵文化財研究所主任「平安京の調査成果について」
- (別掲)人事異動**
3. 31 杉原和雄常務理事・事務局長退職
4. 1 増田耕造常務理事・事務局長就任



## 編集後記

新年度、第1号目となる埋文情報誌をお届けします。

さて、お蔭をもちまして、当センターは本年、設立25周年を迎えることになりました。これもひとえに皆様のご協力の賜物と、厚くお礼申し上げます。

当センターでは、この記念の年にあたって、今秋に特別展覧会やシンポジウムなどの催し、また、府内の遺跡をわかり易く紹介した冊子の刊行を計画しています。

上記行事の開催などについては、今後、ポスター・ちらし・ホームページなどで紹介して参りますので、多数の方々のご参加をお待ちしております。

(編集担当=辻本和美)

## 京都府埋蔵文化財情報 第96号

平成17年6月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER